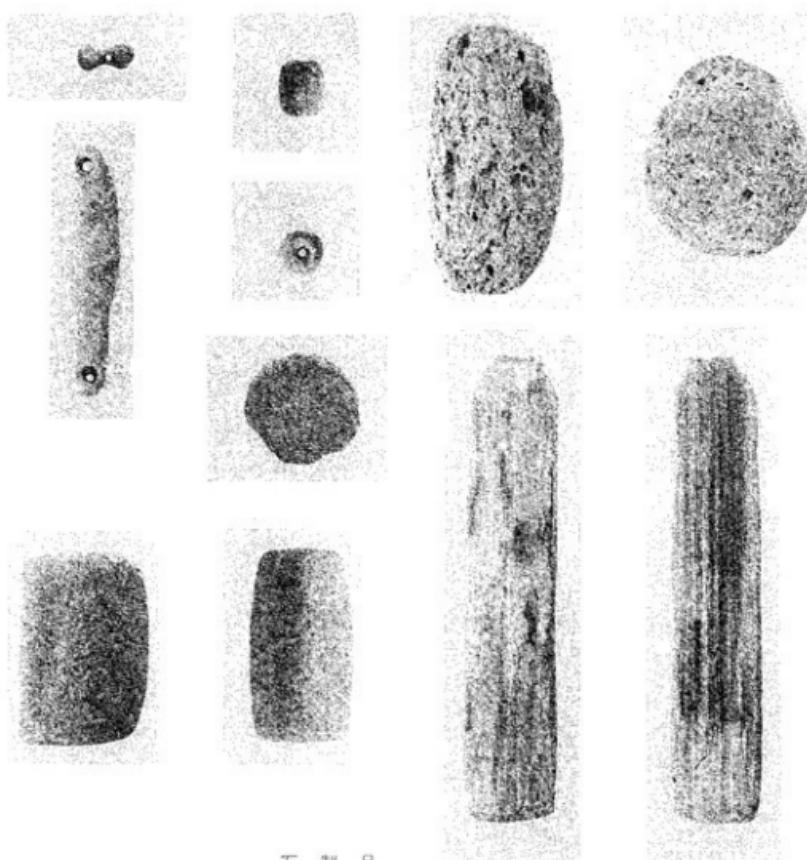


遺構外出土石器

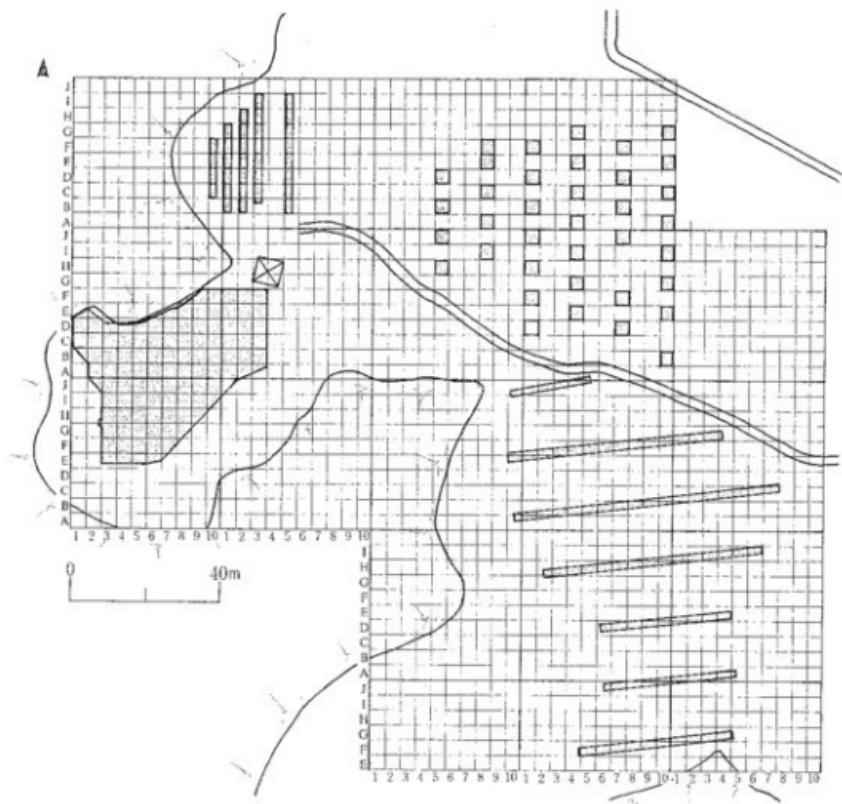


石 製 品

湯ノ沢 A 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形図



第2図 グリッド配置図

遺跡の概観

末戸松本集落の北側に面した標高33~34mの舌状台地上の西端に位置している。検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡1軒、土坑4基、弥生時代中期の住居跡2軒、土坑3基等である。

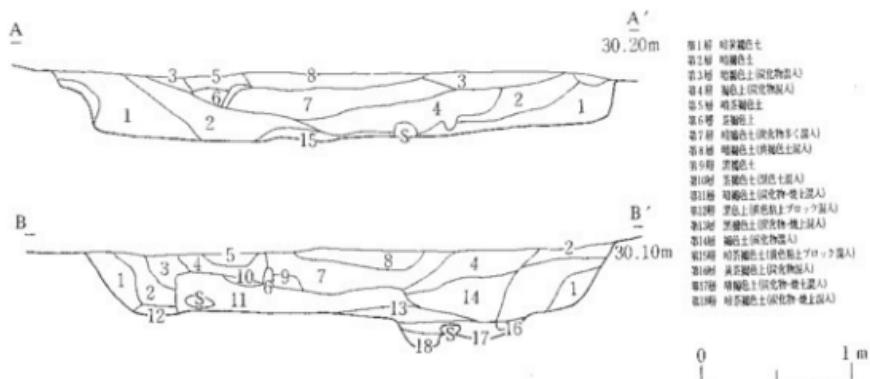
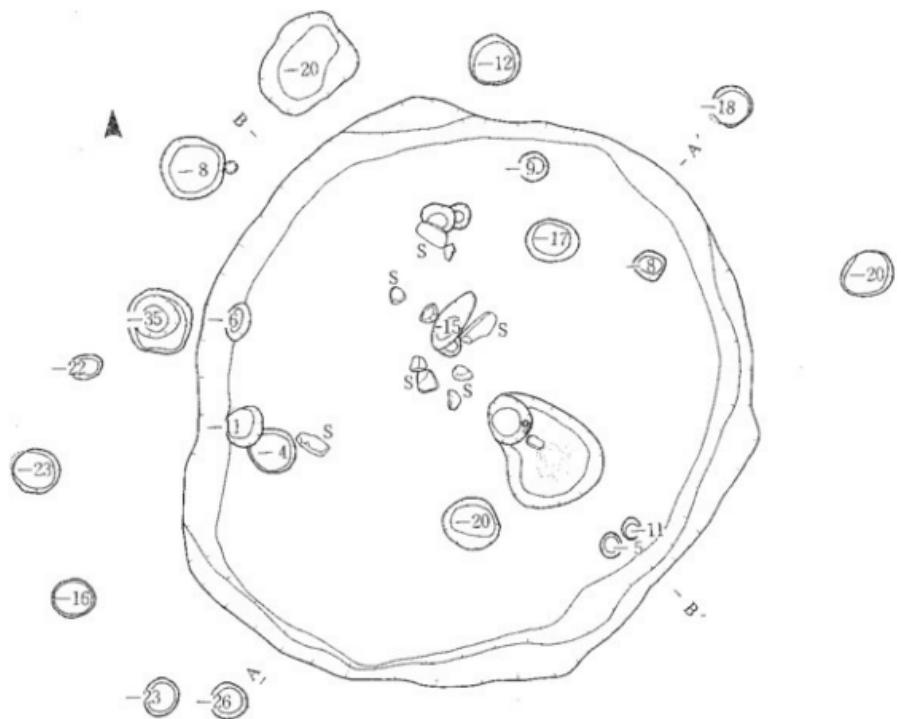
縄文時代中期の遺跡は東方450mに湯ノ沢B遺跡、北東約750mに野畠遺跡がある。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

調査区の北側に位置する。

フランは長軸3.95m、短軸3.65mの梢円形を呈し、確認面から床面までの深さは44cmで、壁は北東側を除き、ややゆるやかに立ち上がる。ビットはいずれも比較的浅く、柱穴ははつきりしない。炉は南東部に位置し、梢円形の掘り込みと土器埋設部が検出された。また掘り込み内には焼土が検出された。床はほぼ平坦である。



第3図 1号住居跡

出土遺物

土器 (第12図1、第15図15~26)

15~16は沈線と磨り消し手法を用いて文様帶を展開する土器である。17~19、21~24は沈線および刺突文によって文様帶を展開させている。1は地文がR L単節鉤繩文（縦位凹凸）である。

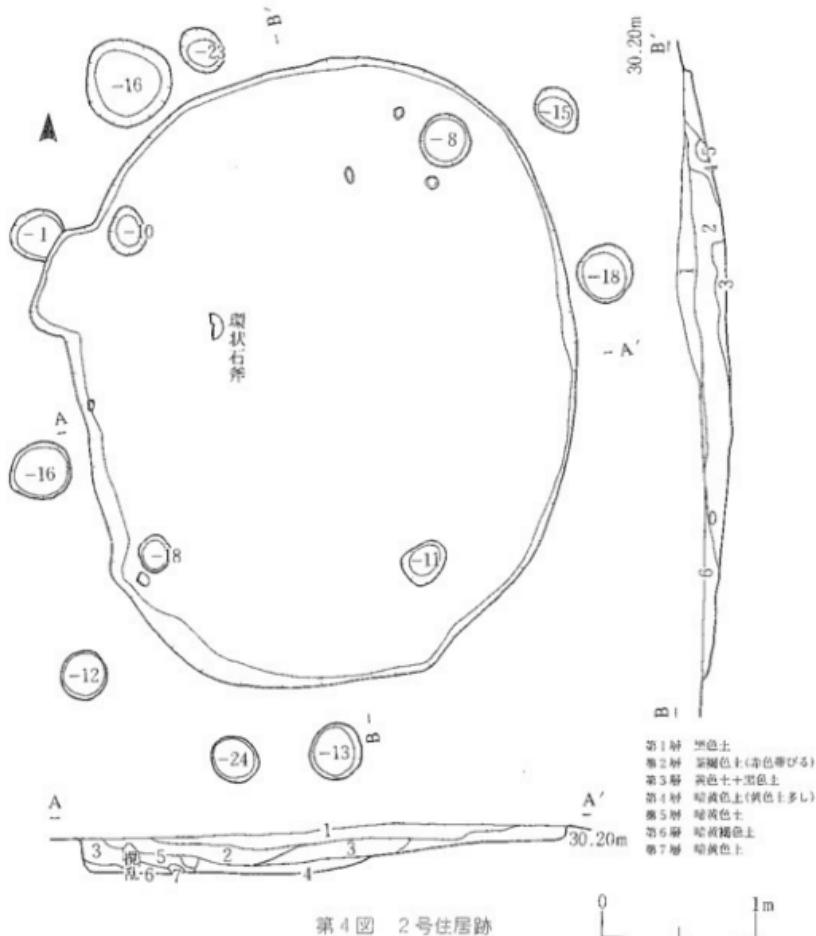
石器 (第18図1~2)

1は無茎の石鏃で、石質は頁岩である。2は削器で側縁部に連続的な調整を施す。頁岩。

土製品 (第15図27~34)

再利用土製品（円盤状土製品）である。

2号住居跡 (第4図)



第4図 2号住居跡

調査区の西端に位置する。

プランは長軸4.15m 短軸3.35m の楕円形を呈する。確認面から床面までの深さは24cmで、壁はゆるやかな立ち上がりを示す。ピットはいずれも浅く柱穴ははっきりしない。床面は東側にゆるやかに傾斜する。

出土遺物

土器（第15図35～38）

35、36は外面に四条一組の沈線を施し、文様帶を展開する。また内面には二条の沈線が施されている。37は口縁部を形成している。

石器（第18図3）

3は環状石斧である。外径15.7cm、厚さ1.2cm、中央孔径2.4cmを計る。中央孔付近には木柄（棒）の装着村として使用されたと考えられる付着物が認められる。

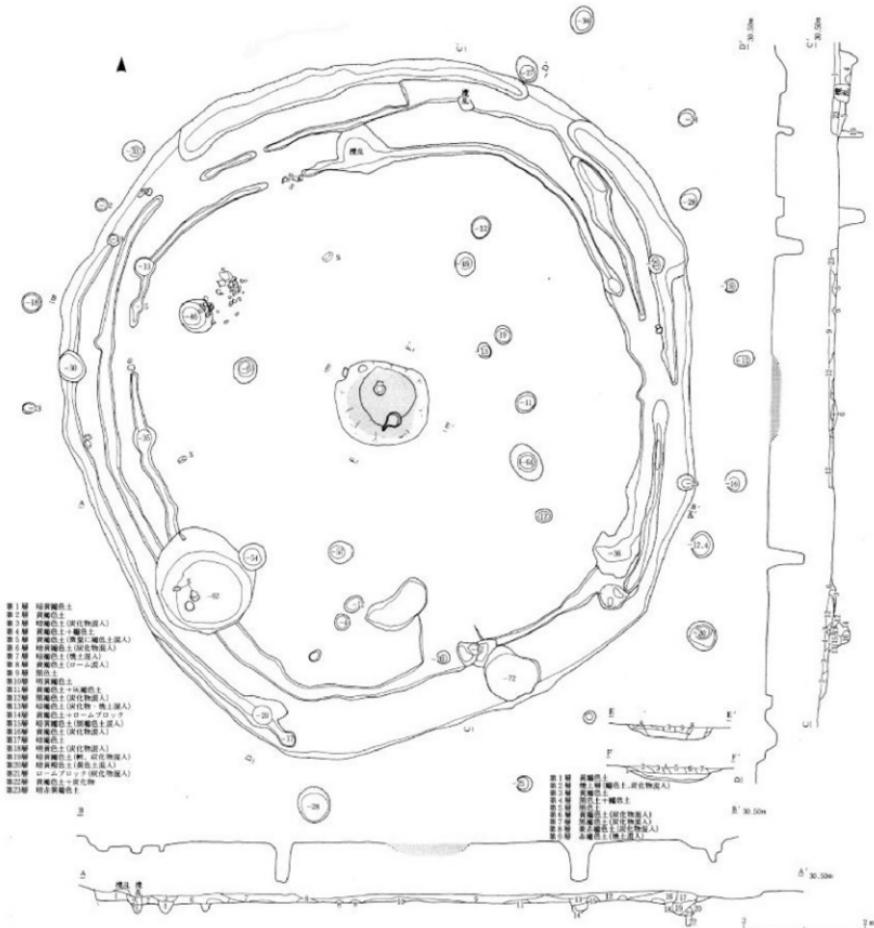
3号住居跡（第5図）

調査区の西端2号住居跡の南東部に位置する。長軸11.6m、短軸10.7mの南北にやや長い円形を呈し、床面積は94.5m²である。壁は高さ10～15cmを計り、ほぼ垂直に立ち上がる。南東側を除き、幅10～40cm、深さ10～45cmの周溝が3条確認された。住居跡中央部に不整椭円形を呈するがが検出された。この炉には焼上、炭化物等が褐色土に混入して堆積している。炉内および周辺にこぶし大の大きさの礫が確認されたが熱を受けた痕跡はない。炉内からは土器片が出土している。主柱穴は深さ45cm以上のものでかに近い4本と考えられる。床面は全体として平坦である。この住居跡の南東部から2号土塁さらに南側から3号土塁が検出された。2号土塁は、3号住居跡精査中に土塁の覆土上を周溝が走ること、さらに周溝覆土内には炭化物が含まれておらず、土塁覆土には炭化物が含まれることなどから、この住居跡よりも古いと考えられる。一方3号土塁は南側の周溝を切ることにより、新しいものと考えられる。

出土遺物

土器（第12図2～5、第16図39～46）

2は覆土、3は床面、4～5はか内、他は覆土からの出土である。2は高环形土器で口径25cmで脚部は欠損している。平坦口縁で肩部で強く内湾している。肩部から体部下半にかけてはL R 単節斜繩文（縦位回転）を施文後、一部を残しきれいに磨き、変形工字文を施している。一方内面には1条の沈線が施されている。3は鉢形土器で体部全体にR L 単節斜繩文（縦位回転）を施文後、口縁部に4条の沈線を施している。内面に1条の沈線が施されている。4は頭部に2条の沈線が施されている。5は体部下半が横方向のミカキによって整形している。いずれも甕と考えられる。39・40は変形字文の施された高环形土器、45・46はR L 単節斜繩文（縦位方向）を施文している鉢形土器。42は口縁部が「く」の字状を呈する壺形土器、43・44は口縁部がゆるやかな「く」の字を呈する壺形土器と考えられる。

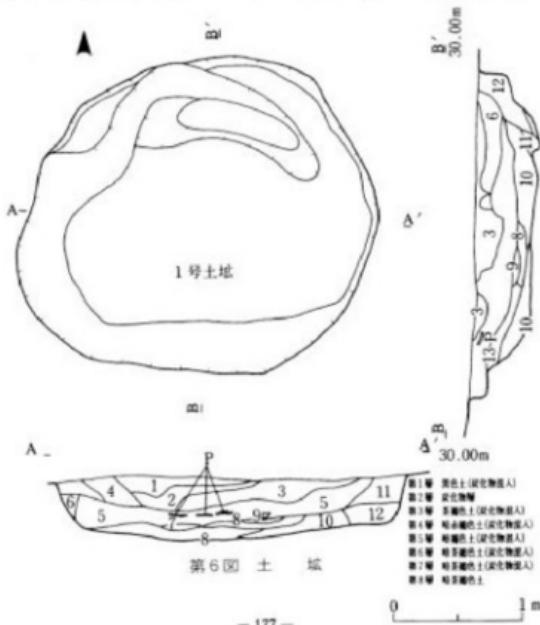


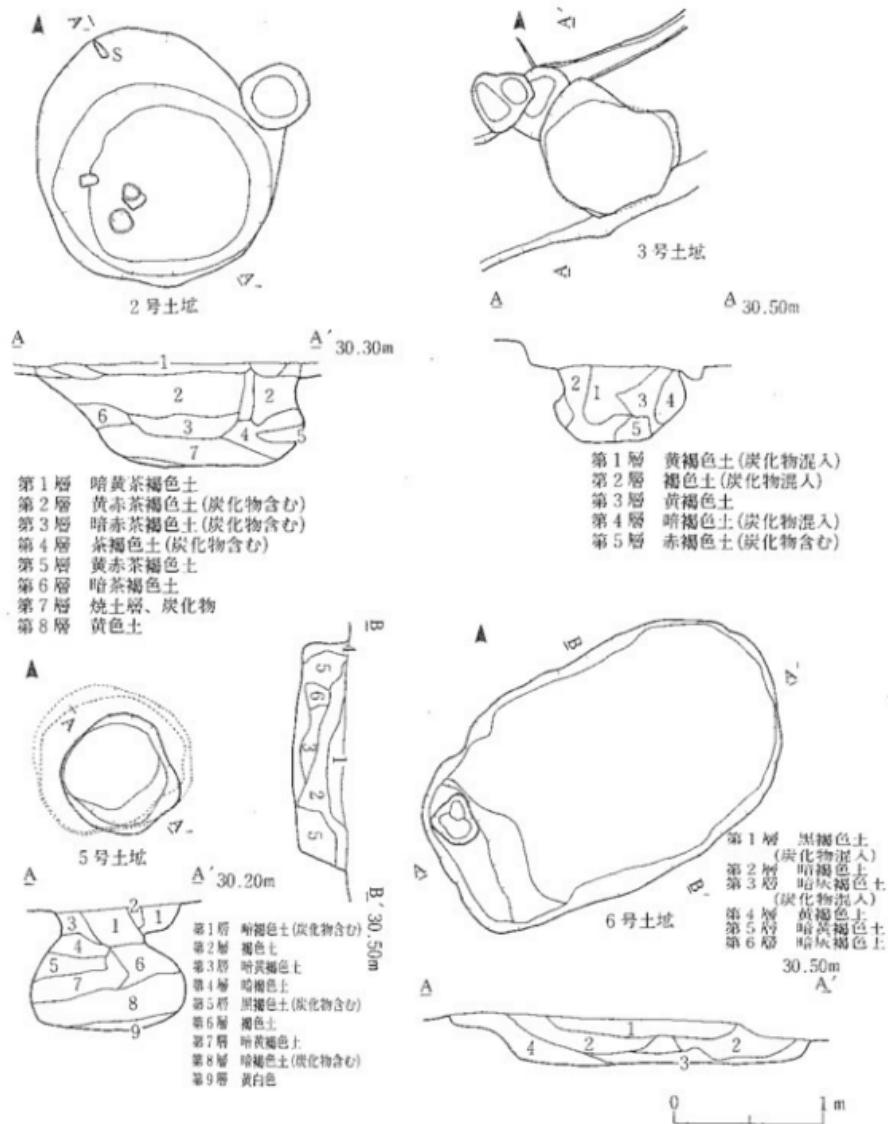
石器 (第18図 4 ~ 13)

4 ~ 6は有茎の石鏃で、いずれも直岩である。7・8は槍先状石器、9は横型石匙で、つまみの部分にはタールが付着している。10は石錐。12はヘラ状石器である。11・13は磨製石斧で13は扁平片刃磨製石斧で、柄部を欠損している。断面形の特徴は、刃部がノミ形を呈することである。

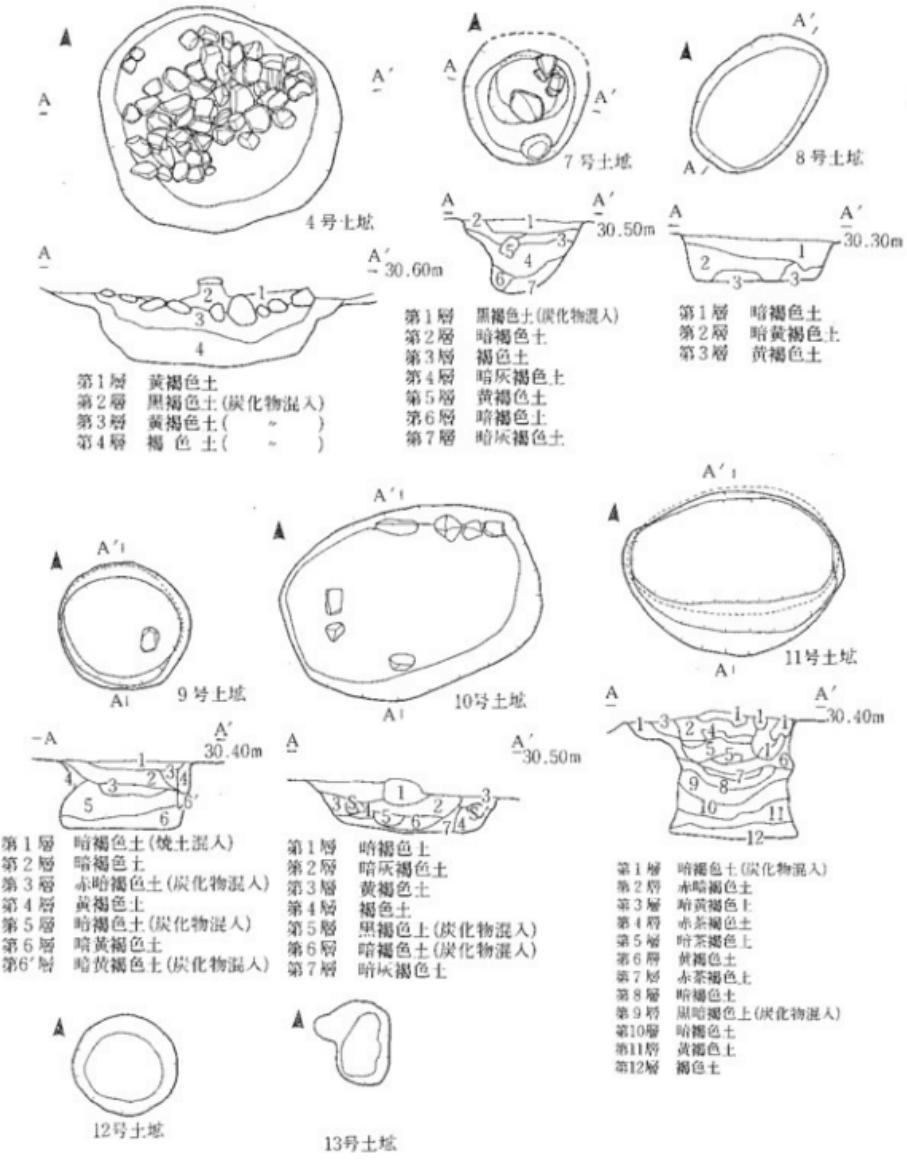
土塁一観表

土地番号	規 模 (cm)			平面形	断面形	出土遺物
	長 軸	短 軸	深 さ			
1	275	240	48	椭円形	鍋底状	第12図6, 第14図47~50 〔縄文時代後期〕
2	174	150	67	椭円形	鍋底状	第12図7, M194636 〔縄文時代〕
3	90	88	50	不整形	袋状	
4	165	150	42	椭円形	鍋底状	第12図8, M194637, 18 〔縄文時代〕
5	104	102	81	不整形	袋状	
6	253	154	34	椭円形	鍋底状	第19図19
7	87	80	49	椭円形	U状	第16図52(弥生時代)
8	100	68	28	椭円形	鍋底状	
9	90	89	45	円形	袋状	第16図3(縄文時代中期)
10	170	123	34	椭円形	鍋底状	第19図20
11	147	110	82	椭円形	ビーカー状	第12図13, 14, M194639~42 〔縄文時代中期~後期〕
12	70	67	20	円形	鍋底状	第12図9(弥生時代)
13	55	35	41	不整形	不明	第17図71





第7図 土 坡



第8図 土 塚

豎穴状遺構（第9図）

調査区のはば中央部に位置する。

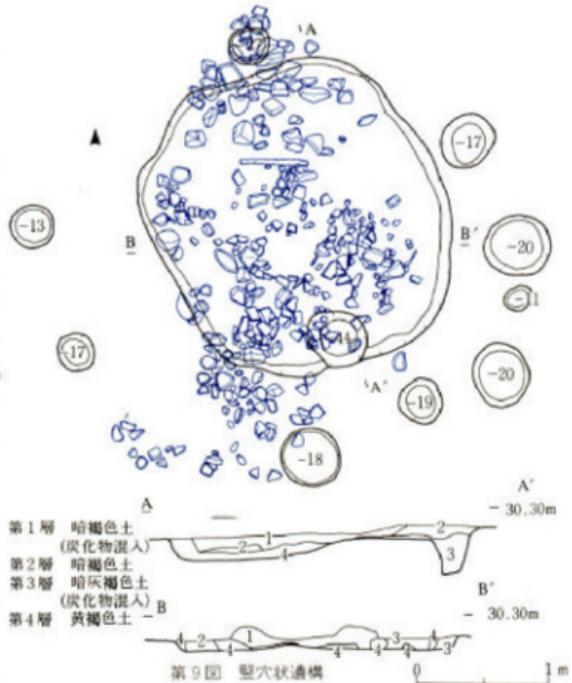
プランは長軸2.35m、短軸2.16mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは7~15cmを計る。壁は底部よりややゆるやかに立ち上がる。覆土は褐色系の土で若干の炭化物を含んで堆積している。この覆土よりも上層から多数の礫、土器片、また石棒等が出土している。

ピットは外側に数個確認された。

出土遺物

土器（第13図、第17図
63~67）

63~64は広口壺口縁部



で、いずれも波状口縁をなし、頸部には刷毛目が残っている。地文はいづれもRL 単節斜縫文（縦位回転）である。65~67は平行沈線を主体として文様を開ける鉢形土器である。大型の壺には、横位および縱位の3条の沈線によって、文様帯が4分割されている。なお沈線間および体部の一部には、ベンガラが塗られている。

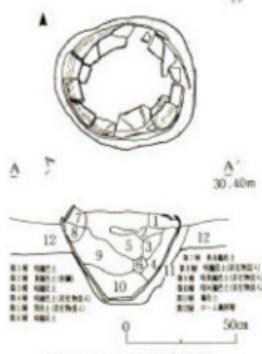
石器（第18図14~15、第19図21~22）

14~15は石鏃。15は有茎石鏃である。いづれも頁岩である。21はくぼみ石、22は石棒で、計測値は現存部で長さ55cm、幅4.55cm、厚さ4.93cmである。断面形は楕円形を呈する。

土器埋設遺構（第10図、第14図10）

調査区の南西部、4号土塙の北側で検出された。

掘り方は、長軸1.28m、短軸1.18mの東西にやや長い円形でローム層を擂鉢状に約70cm掘り下げている。掘り方の底部より



第10図 土器埋設遺構

2cm上方に、壺形土器を据えている。壺形土器は、口径推定25cm、胴部最大径55cm、底径13.4cm、器高59.2cmを計る。

文様帶は、頸部および肩部（体部上半）に3条の浅い沈線を横位に施し、この両方を同じく3条の縦位の沈線によって5単位に区画している。この区画内の対角を2条の沈線によってX字状に分割し、その内部に繩文を施している。さらには唇部の外面に2条、内面に1条の沈線を施している。

土器埋設遺構（第11図、第14図11）

調査区のはば中央部、堅穴状遺構の西側に位置する。

掘り方は、長軸39cm、短軸38cmのはば円形を呈し、
鉢状になっている。深さは21cmを計り、底部より10
cmほど上方に、体部下半を打ち欠いた土器が斜位に掘
えられている。

七器は、単軸絡条体による施文後に沈線によって区
画し、文様帶を展開させている。

遺構外出土遺物

遺構外出土の土器を施文様から次のように分類した。

1群土器

1類（第21図82～84）

横位ないし波状に押圧繩文が施される。粘土紐によ
る隆帯が押圧繩文によって縁どられているものもある。

2類（第21図85～87）

やや外反し、肥厚する深鉢形土器で、口縁部に幅広い磨り消しによる無文部があり、そこに刺突
の行なわれるものもある。

3類（第21図88）

沈線で文様帶を区画し、間に刻目を施文しているものである。

2群土器

1類（第21図89・90・92）

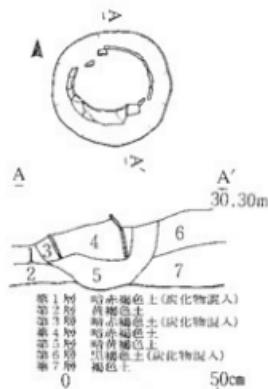
地文に繩文が施されるものである。

2類（第21図91・93・96～103）

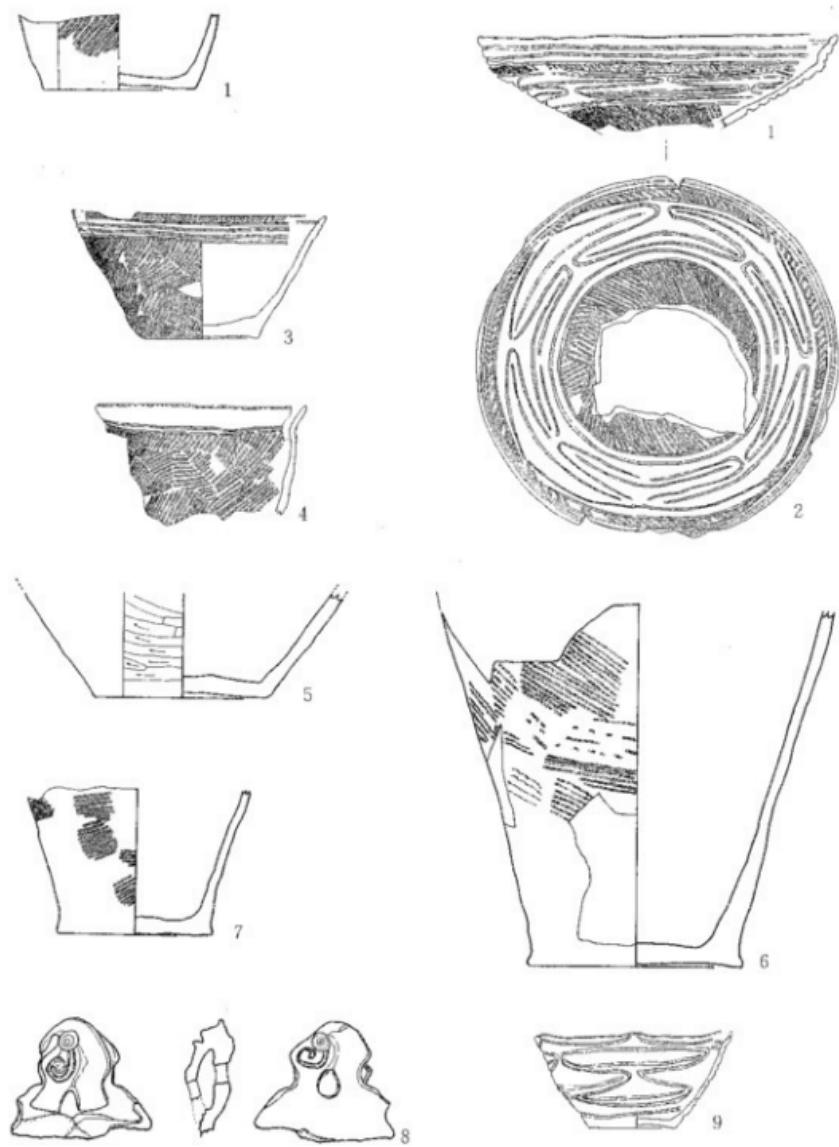
浅い沈線によって施文されているものである。曲線的なもの、直線的なものの他に、刺突される
ものなどがある。

3類（第21図94・95・104）

網目状撚糸文の施されるものである。104のように、やや太い粘土紐を弧状に貼り付けた後、刺
突を施しているものもある。



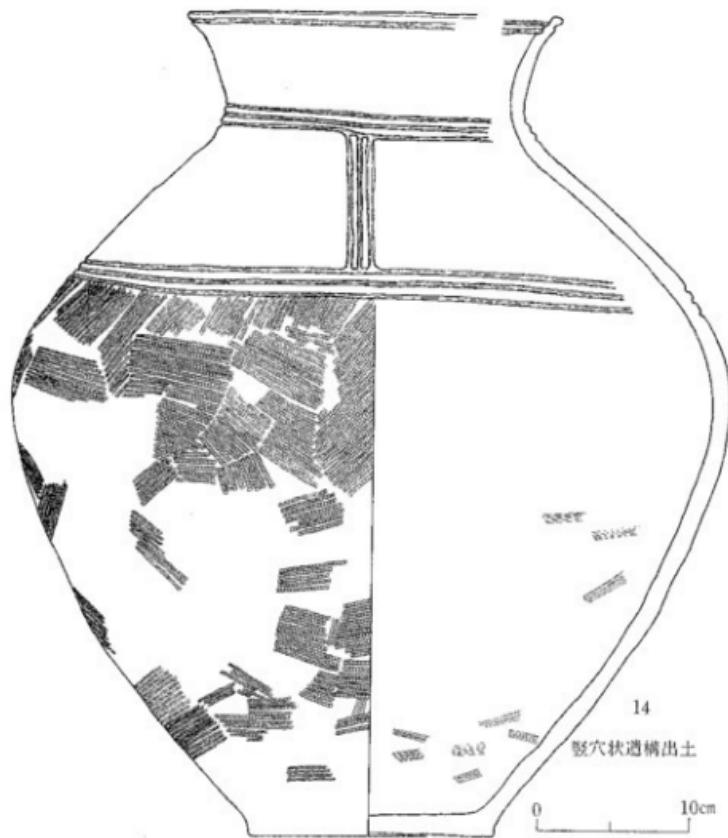
第11図 土器埋設遺構



1 号住居跡
 2 - 5 3号住居跡
 6 1号土地
 7 2号土地
 8 11号土地
 9 12号土地

0 10cm

第12圖 遺構内出土土器



第13図 造構内出土土器

3群土器

1類（第21図105～107、第22図108～115）

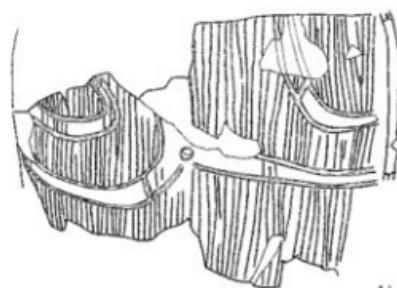
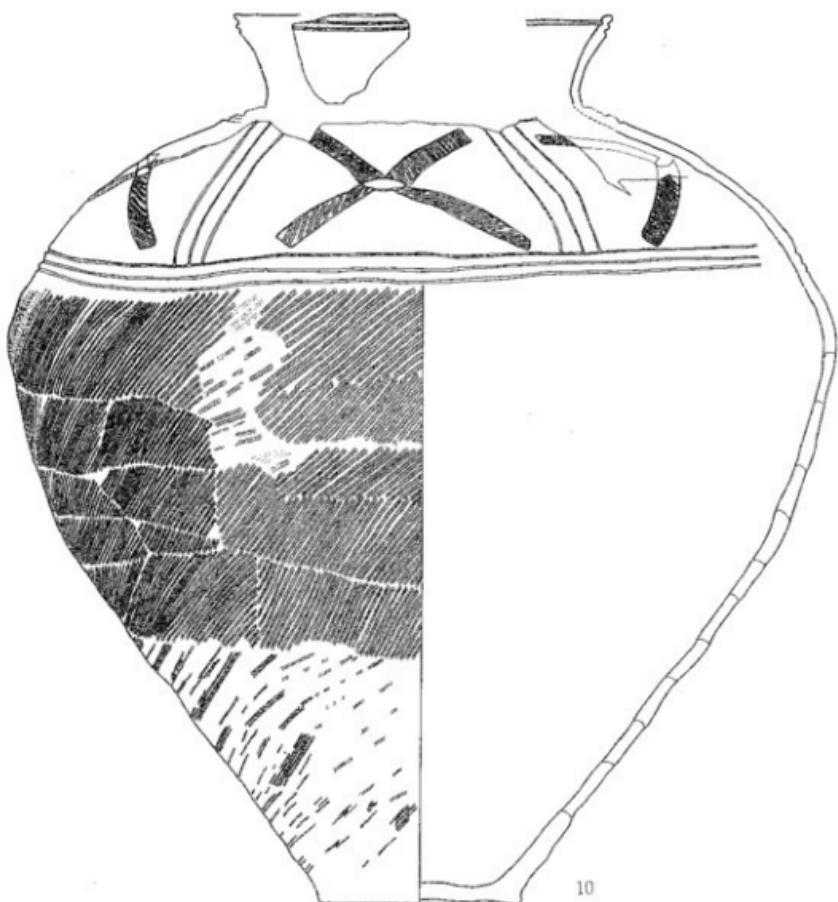
頸部がくびれ「く」の字状を呈する広口甕で、口縁部から頸部にかけて無文帶のもので、口唇部に繩文がみられるもの、頸部に横位の刷毛目のみられるものなどがある。

2類（第20図75、第22図116～127・134、第23図135・137）

頸部に2～3条の平行沈線の施される鉢形土器、變形土器である。沈線間に連續山形文の施されたもの、波状口縁に沿って沈線が施されるものなどがある。

3類（第20図72・76、第22図129～133、第23図138～146）

変形丁字文が施文されている、鉢形土器、浅鉢形土器、高环形土器である。いずれも断面はきれいに磨かれており、146は連續山形文が描かれている。



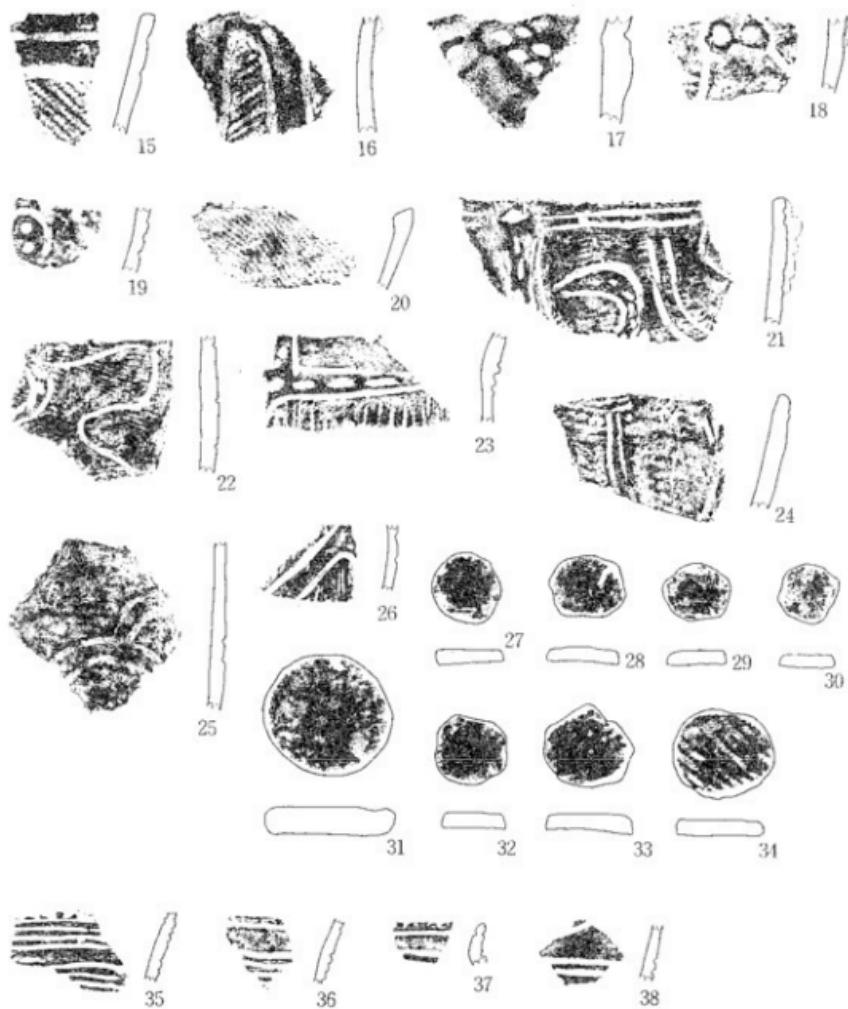
10 土器埋設遺構
11 土器埋設遺構
12 ピット 3
13 ピット 9

0 10cm

第14図 遺構内出土土器

4類 (第20図73・77・78)

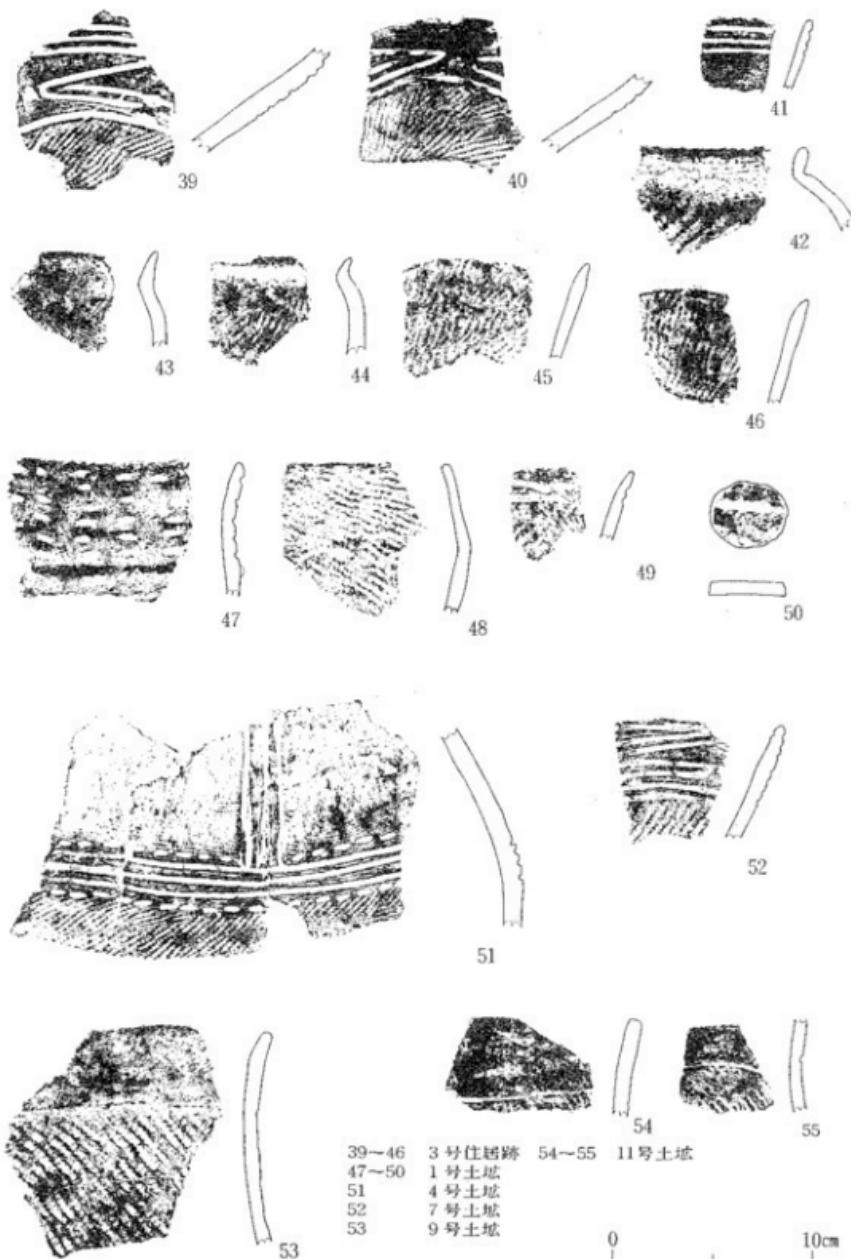
2ないし3条の沈線が施されている蓋形土器で、沈線は2段以上めぐると考えられる。



15~34 1号住居跡
35~38 2号住居跡

0 10cm

第15図 遺構内出土土器・土製品



第16図 遺構内出土土器



第17図 遺構内出土土器

土製品（第23図150～155）

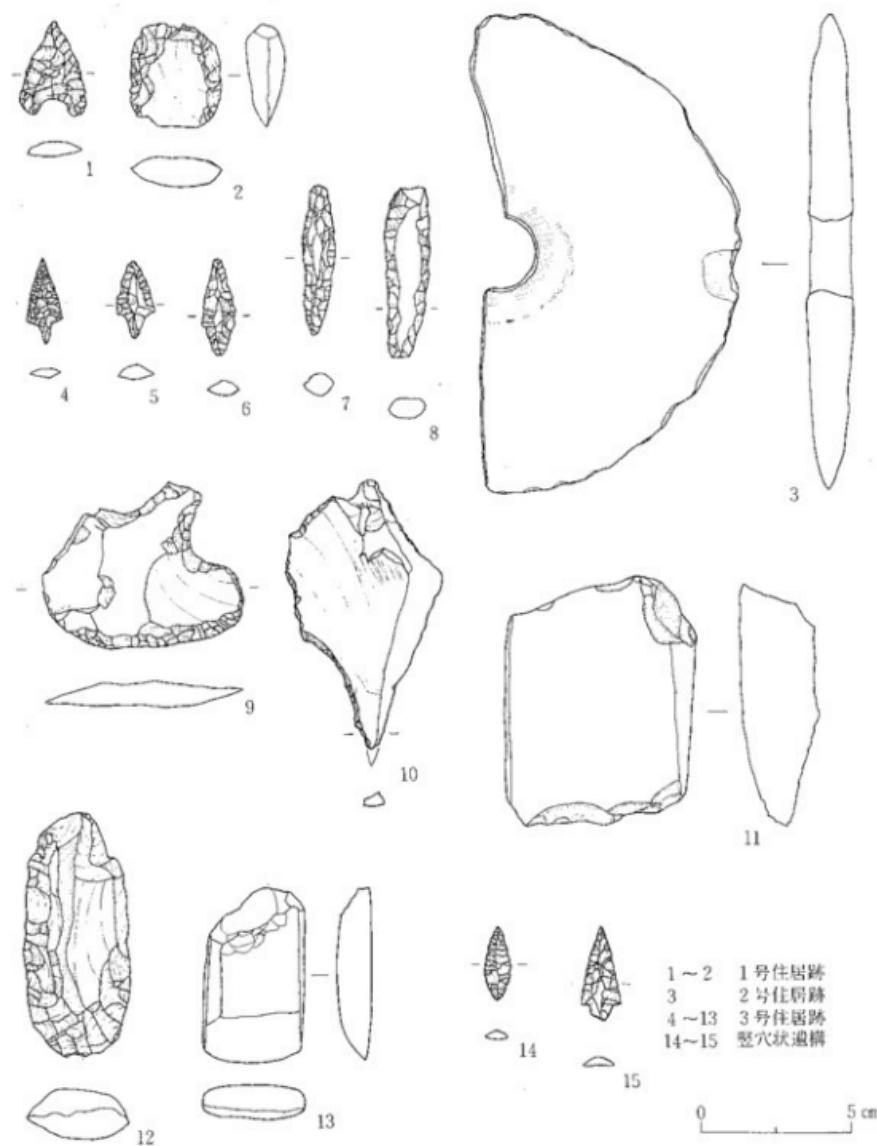
150～154は再利用土製品（円盤状土製品）。155は土偶状の土製品である。

石器（第24図23～33、第25図35～43）

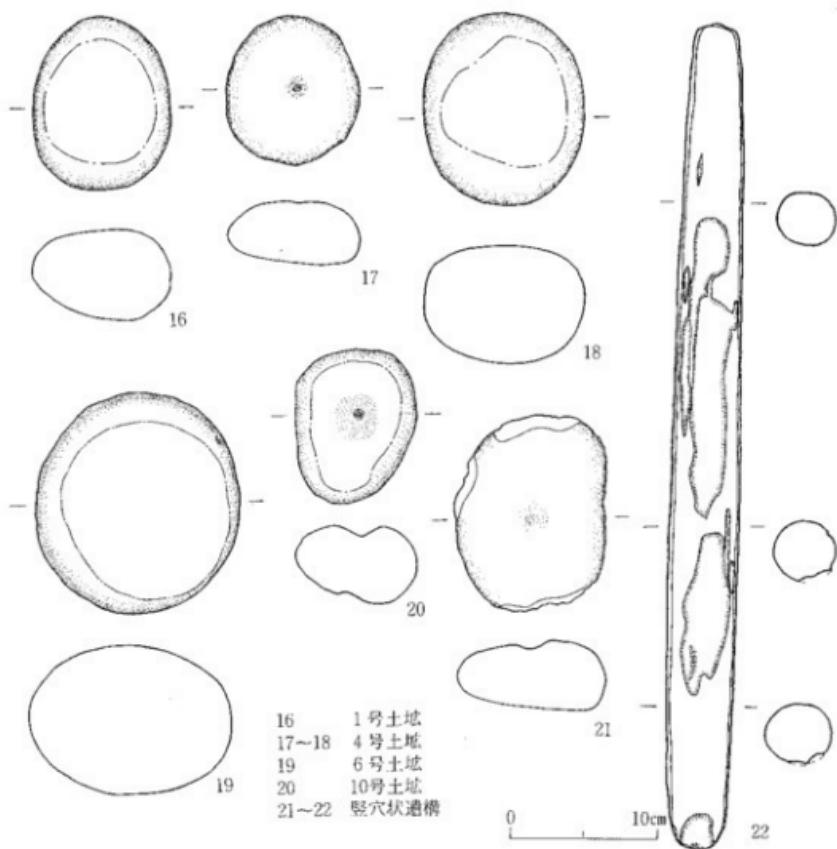
23～25はヘラ状石器で、いずれも頁岩である。26～28は剝片の側縁に連続的な調整を施した削器状石器である。29は搔器状石器で頁岩である。30～33は磨製石斧。35～39は磨石。40、41はくぼみ石。42、43は石棒である。

觀圧痕土器（第20図73）

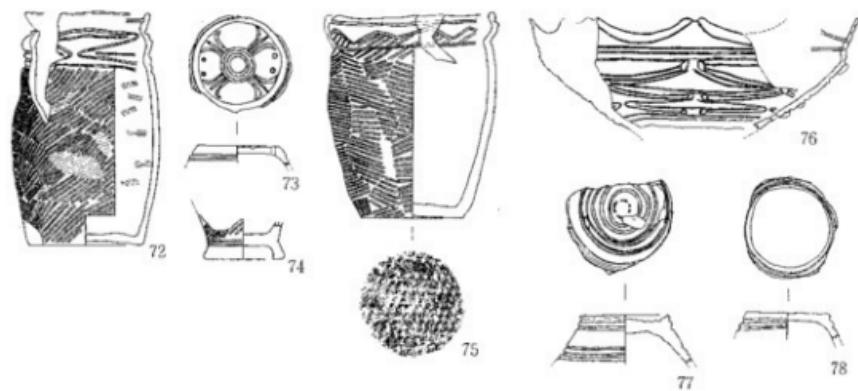
蓋形土器で、体部に平行沈線が巡り、上面には同心円状に2条とX状に3条の沈線が施され、2個1対の焼成前穿孔が2対認められる。器面内部に長径6.3mm、短径3.4mmの丸味を帯びた短粒米の模様が観察された。模様は、土器製作の過程で粘土に混入した稈穀が、土器焼成後に炭化離脱したものと考えられる。



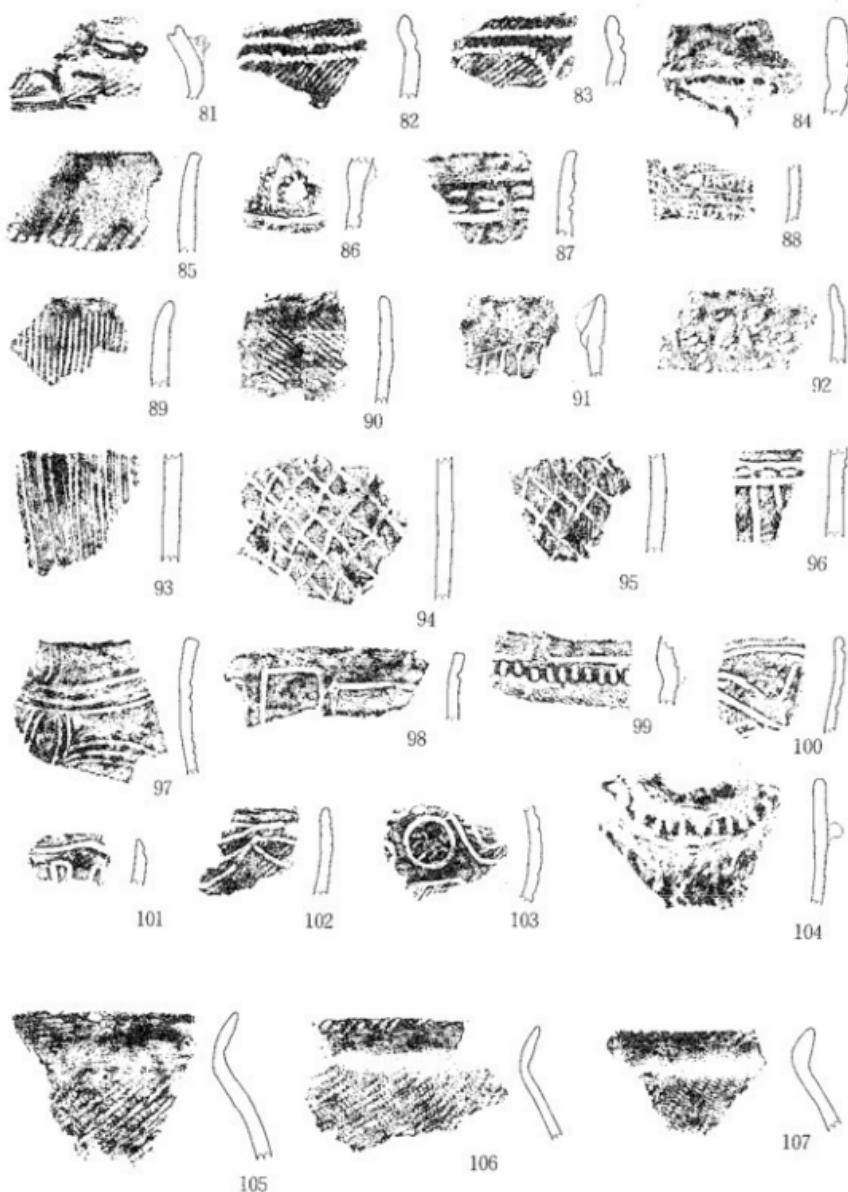
第18図 遺構内出土石器



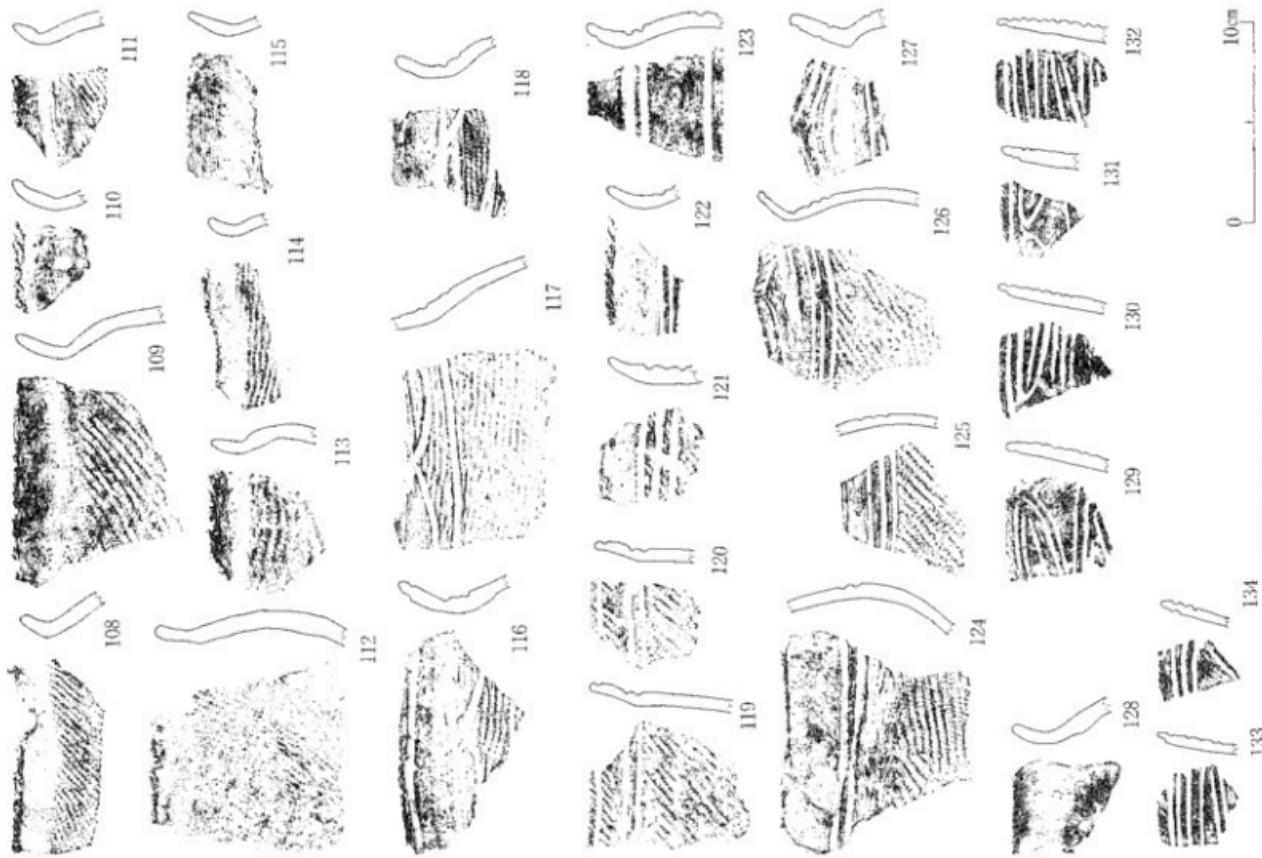
第19図 遺構内出土石器



第20図 遺構外出土土器

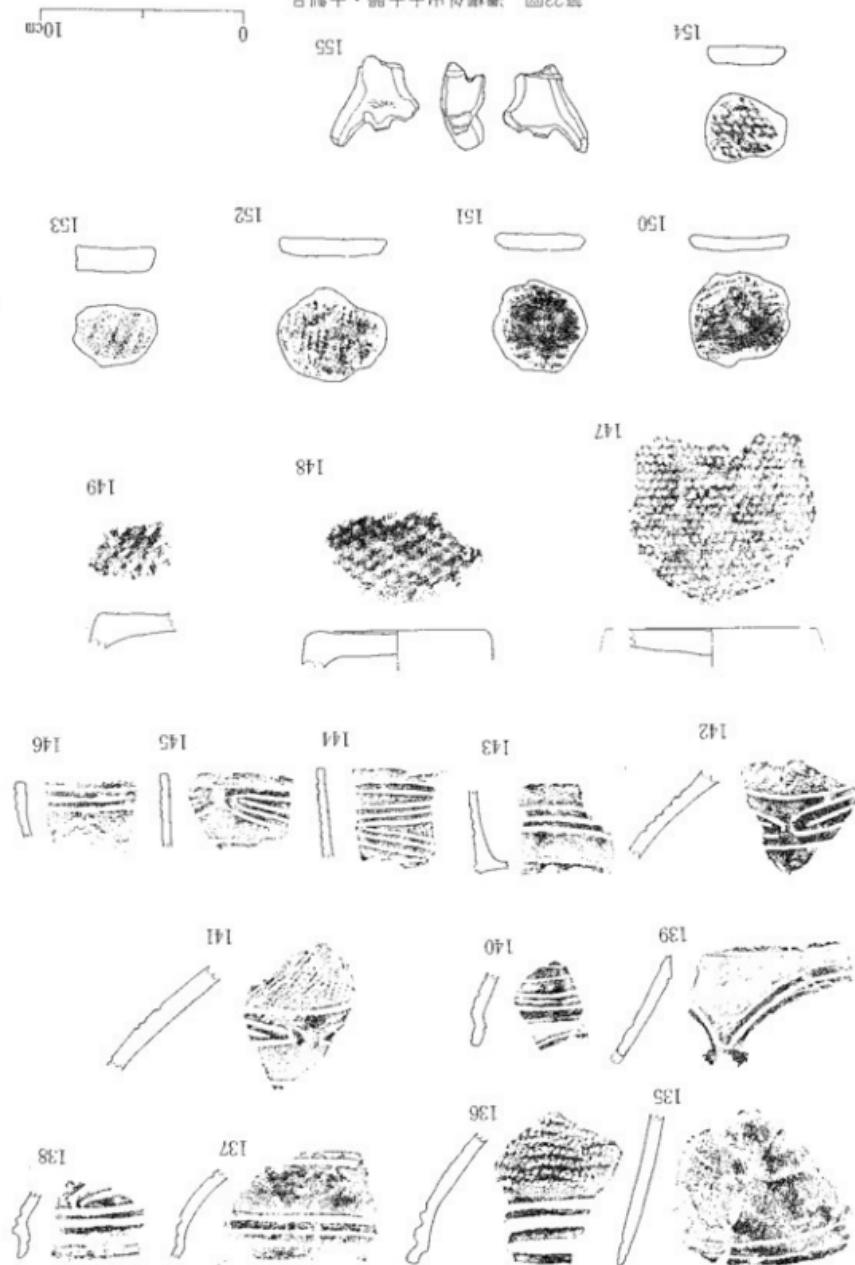


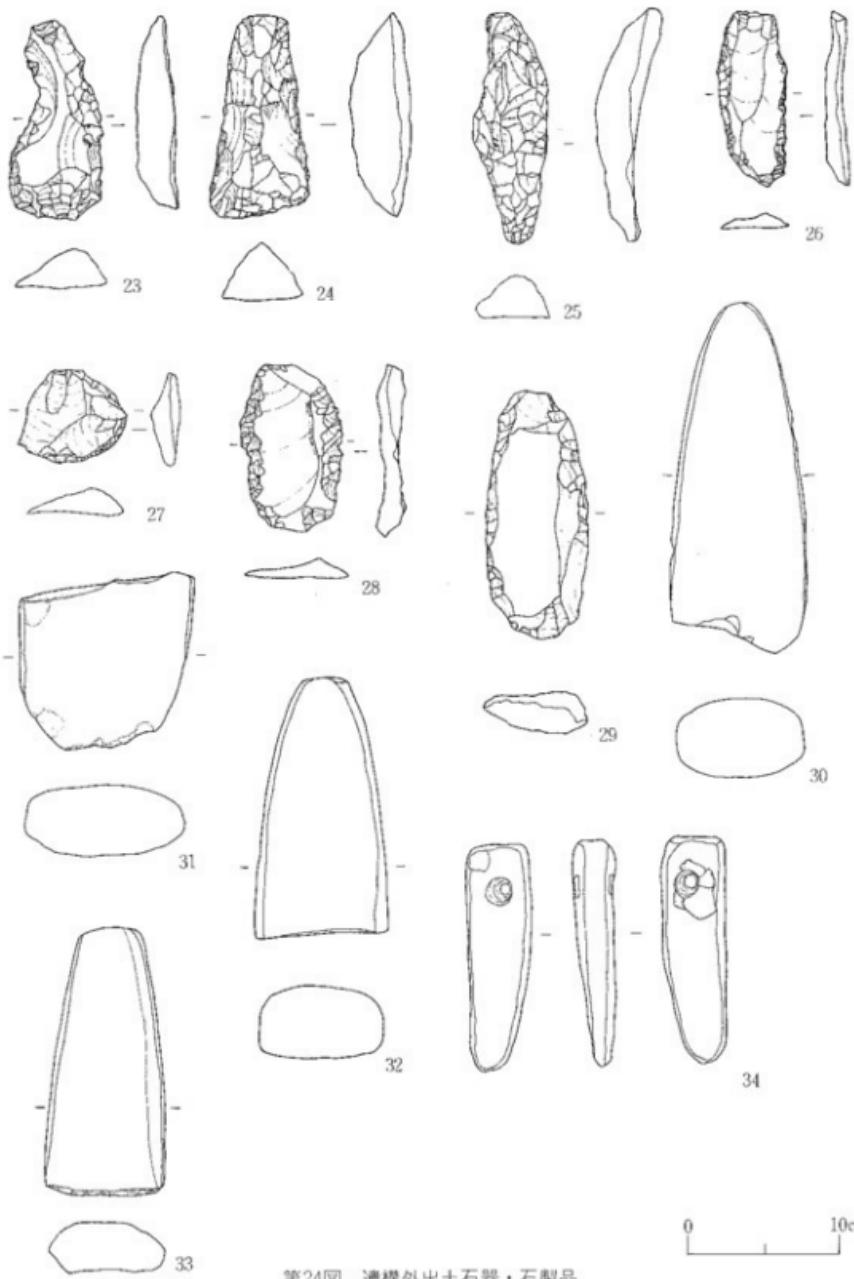
第21図 遺構外出上土器



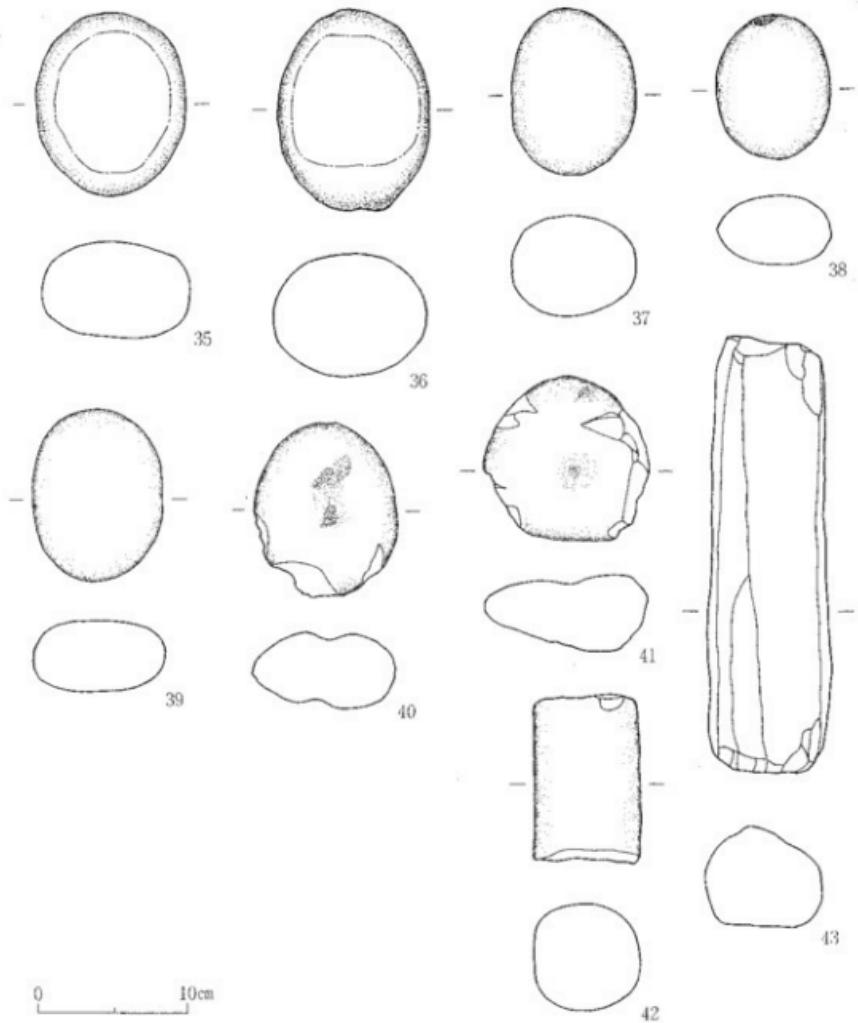
第22圖 遺構外出土器

第23圖 遺物外出土土器・土製品





第24図 遺構外出土石器・石製品



第25図 遺構外出土石器

まとめ

遺構について

本遺跡で検出された遺構は、既述の通り、住居跡3軒、土塙13基、上器埋設遺構2基である。住居跡は出土土器から、繩文時代中期末葉(大木10式期)ー1号住居跡、弥生時代中期前葉ー末葉ー2・3号住居跡、に位置づけられる。

3号住居跡には、3条の周溝がめぐり、それぞれに切り台い関係は認められなかった。周溝が2号土塙覆土上層面で検出され、周溝の覆土各々に相異点は認められないこと等から、この住居跡における拡張、あるいは縮少のいずれかについては、はっきりしない。

駅内における弥生時代の住居跡検出例は、本遺跡も含めて現在2例しかなく、構築のあり方については詳述できないが、主柱穴の対角線上に炉が位置すること、主柱穴が4個であることなどと共にした特徴がみられる。若美町横長根A遺跡では、4個の主柱穴の対角線上に地床が位置し、周辺には縁が検出されている。

本遺跡と関連して、台地下の地蔵田溜池をはさんで、本遺跡とは対峙する台地上に地蔵田B遺跡が位置し、田舎館式併行の壇形土器が出土している。この遺跡は昭和60年に発掘調査の予定であり発掘調査の結果をふまえて、湯ノ沢A遺跡との関係を把握したいと考えている。

土器について

遺構外出土の土器については、1群から3群に分類したが、これらを遺構内出土の土器とともに時期等について触れてみたい。

1群1類は円錐上層a式に比定されるものである。2類は大木10式に比定できるもので、1号住居跡出土の土器がこれに該当する。

2群2類は沈線で幾何学的な文様、曲線的な文様等を施すもので、後期の上器に属する。

3群は変形工字文が主体をなすもの、また沈線を主体とするものなど、弥生時代中期に属する土器である。

弥生式土器について

遺構内外出土の弥生式土器の器種、器形、文様などから、おおよその時期を求めてみたい。

12図2は高环形土器で、体部に施文されている変形工字文は、谷起島式、また山王田層式にみられる「流水文」的な文様である。大洞A'式や砂波式にみられる「粘土粒貼付」、あるいは交点における「彫り込み」等の要素が欠如していることから、いわゆる「変形工字文C型」^(註1)と考えられ、中期前葉に属するものであろう。

12図3は鉢形土器で、圓形突起を有し、体部には「流水文」的な変形工字文を施している。中期前葉に属するものと考えられる。

12図9は鉢形土器で、山形突起を有し、体部には「流水文」的な変形工字文を施している。中期前葉に属するものと考えられる。

13図14、14図10、16図51は3条の沈線による文様体の構成を主とする壺形土器で、沈線の他は13図14、14図10、16図51は、3条の沈線による文様体の構成を主とする壺形土器で、沈線の他は無文のもの、X字状に分割されるもの、また刺突文を有するものの3型態に区分される。この文様帶を有する土器については、今後の調査研究による同型式の報告をまって時期について触れたいと考えている。

20図72は鉢形土器で、半球状にふくらんだ胴部の上部に変形工字文が施される。中期前葉に比定される地蔵池式（山形）に類似した鉢形土器が出土している。

20図75は鉢形土器で、半球状にふくらんだ胴部の上部に連続した山形文がみられる。中期中葉の二枚橋～宇鉄Ⅱ式期に属するものと考えられる。底部に網代痕がみられる。

20図76は山形突起を有する高環形土器で、粘土粒を有する変形工字文が施されている。中期前葉の砂沢式期に属するものと考えられる。

21図105～107、22図108～125は口唇部に縹文を残し、頸部が無文のものや、これをはさんで、上下を数本の沈線で施している。（頸部の無文帯には刷毛目文はみられない。）中期前葉に比定される飯森式期に属するものと考えられる。

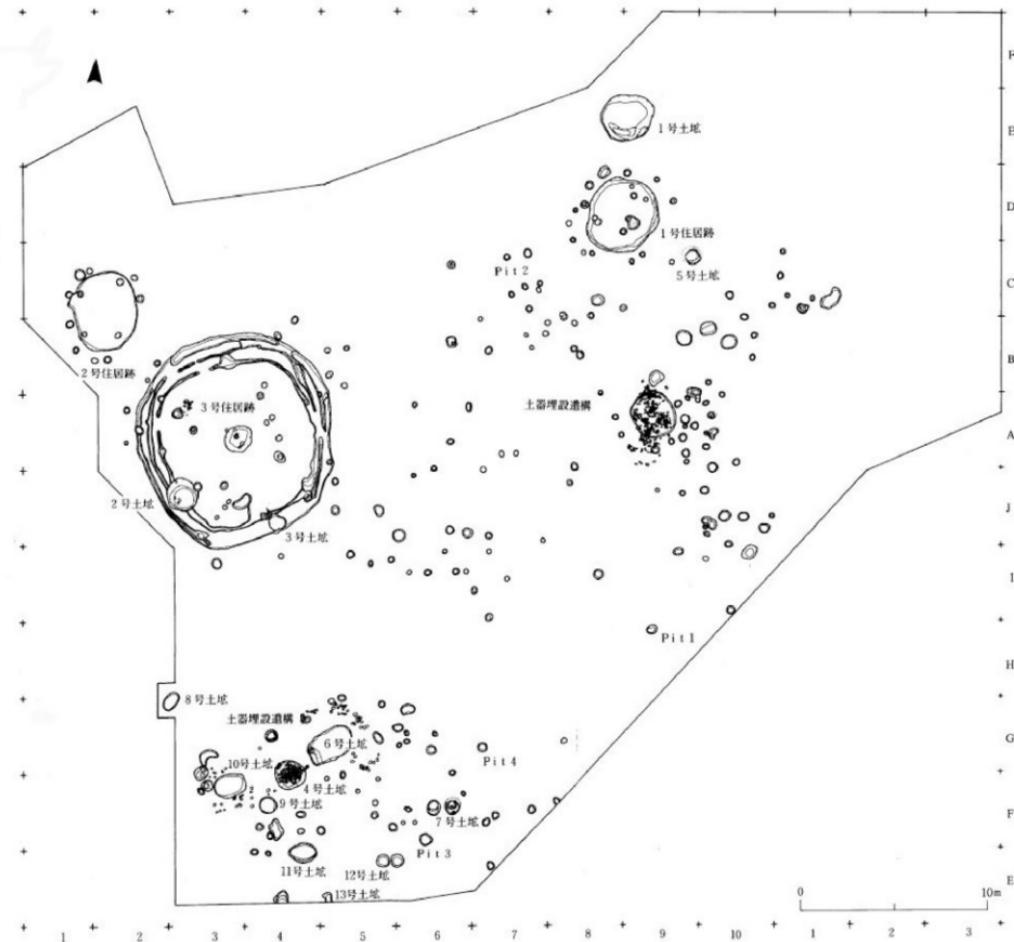
以上、遺構内外出土の弥生式土器について概観してみた。本遺跡における器種は、甕・鉢形土器・高環形土器・壺形土器・蓋形土器である。このように、器種・文様等から弥生時代中期前葉～中葉に位置づけられる土器は県内ではまだ断片的にしか出土しておらず、また中期以降の土器についても同様である。したがって、縦年的位置づけもまだ不明確な点がある。今回の調査で得られた資料や、今後の調査研究によって得られるであろう資料をもとに、東北北部の弥生時代について明確化していく必要がある。

(注1) 伊東・須藤 「瀬野遺跡」 1982

(注2) 須藤 「東北地方の初期弥生土器」 考古学雑誌 1983

参考文献

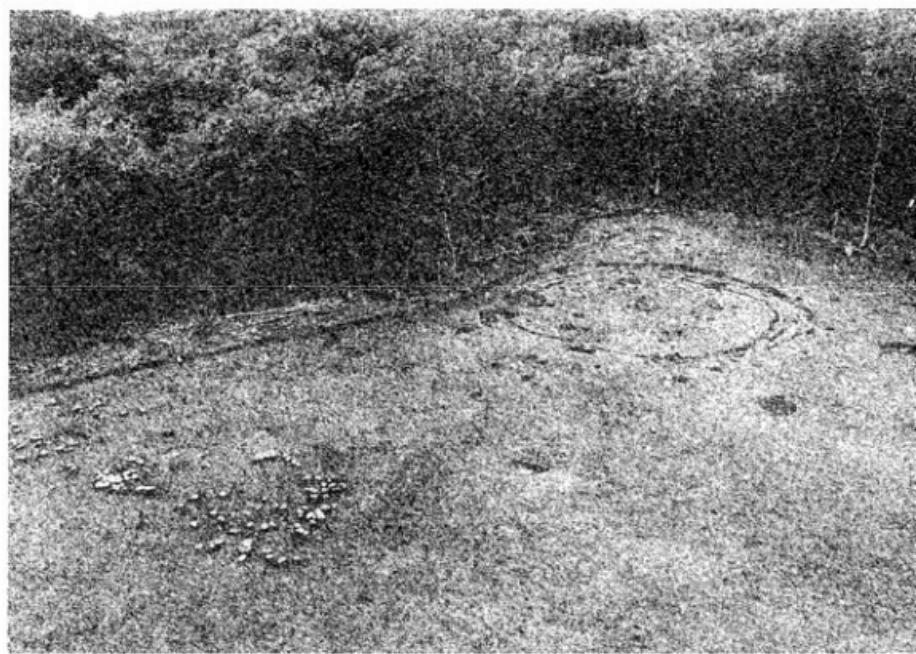
- 須藤 隆 : 「秋田県大曲市字津ノ台遺跡の弥生式土器について」 文化33—3 1970
- 須藤 隆 「土器組成論」 考古学研究 19—4 1973
- 横手市教育委員会 : 「手取清水遺跡発掘調査報告書」 1974
- 小玉 準 : 「男鹿半島の弥生式土器・日本海上交通史の一断面」 男鹿半島研究
男鹿地域研究会 1975
- 小武海松四郎 : 「穂積土器をともなう秋田県南秋田郡井川町新間遺跡遺物について」 1977
- 橋 善光 : 「入門講座 弥生土器 北東北」 考古学ジャーナル 160、162、166、168
1979
- 小玉准、島山憲司 : 「山利町上の台遺跡採集の弥生式土器」 本莊市史研究 1981
- 伊東信雄、須藤隆 : 「瀬野遺跡 —青森県下北部脇野沢村瀬野遺跡の研究」 東北考古学会 1982
- 秋田県教育委員会 : 「平鹿遺跡発掘調査報告書」 1983
- 須藤 隆 : 「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅲ層式—」 考古学雑誌 1983
- 須藤 隆 : 「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」 考古学論叢 芹沢長介先生還暦記念論
文集刊行会 1983
- 若美町教育委員会 : 「横長根A遺跡第2・3次発掘調査略報」 1983



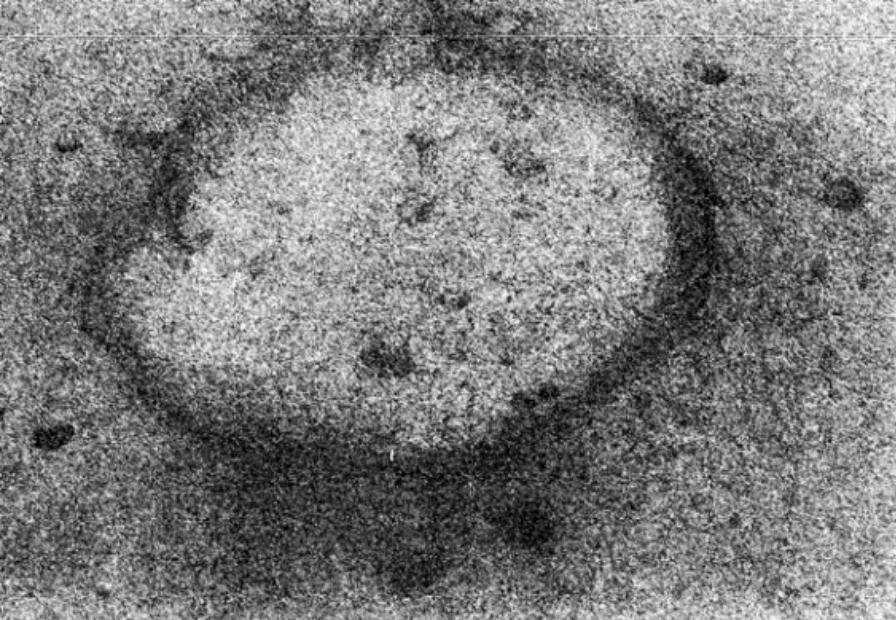
第26図 遺構配置図



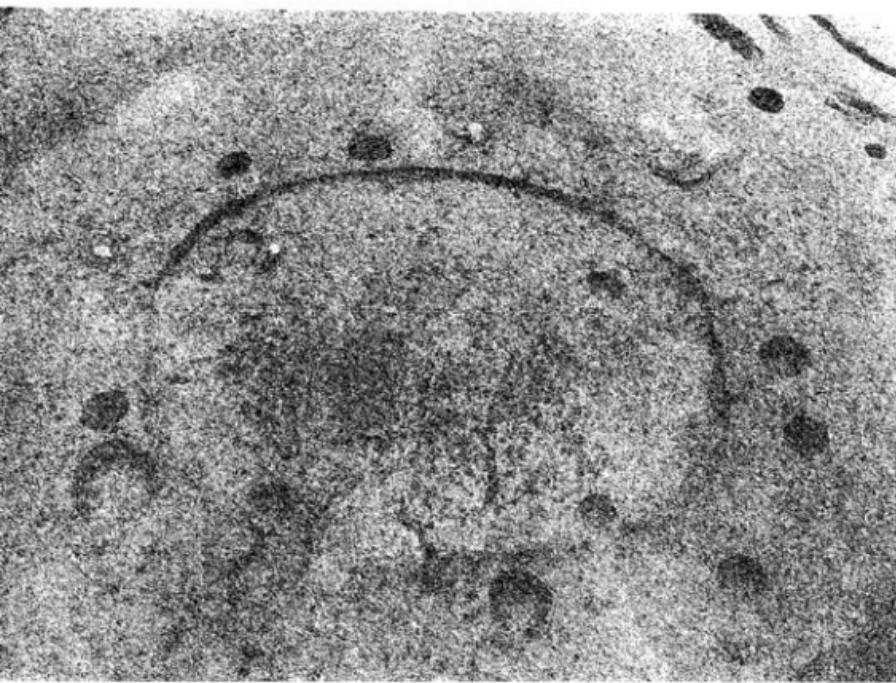
遺跡全景（東→）



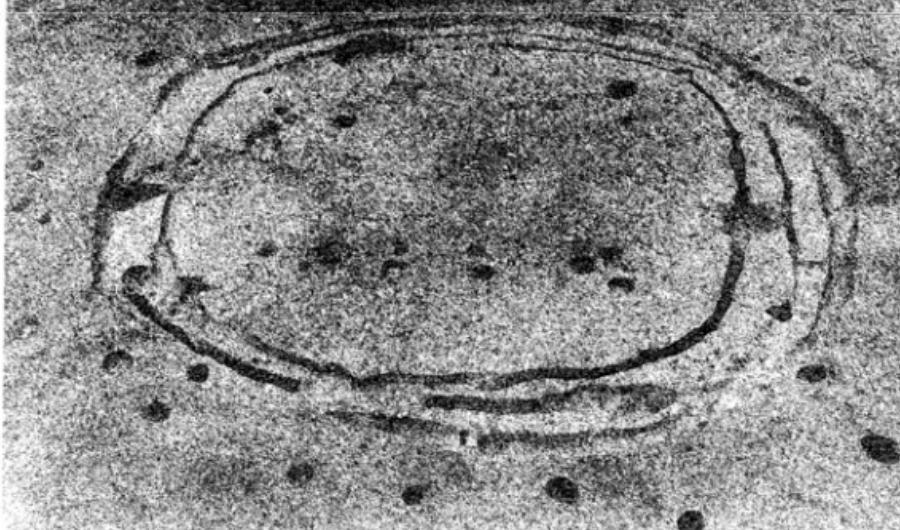
遺跡全景（南→）



1号住居跡（南→）



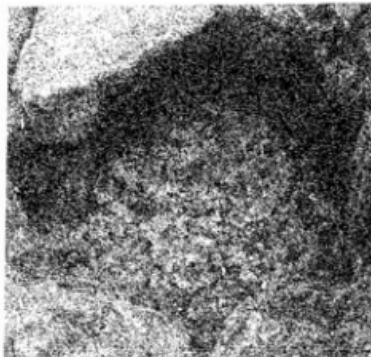
2号住居跡（西→）



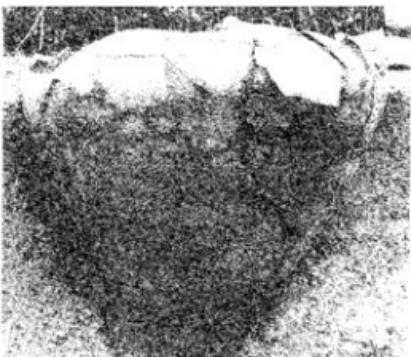
3号住居跡（南→）



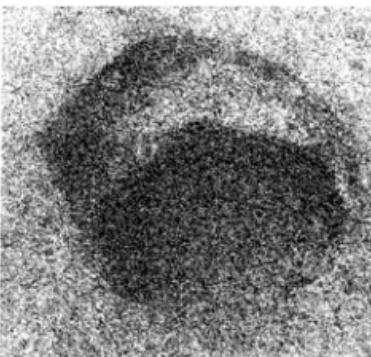
土器埋設遺構（北→）



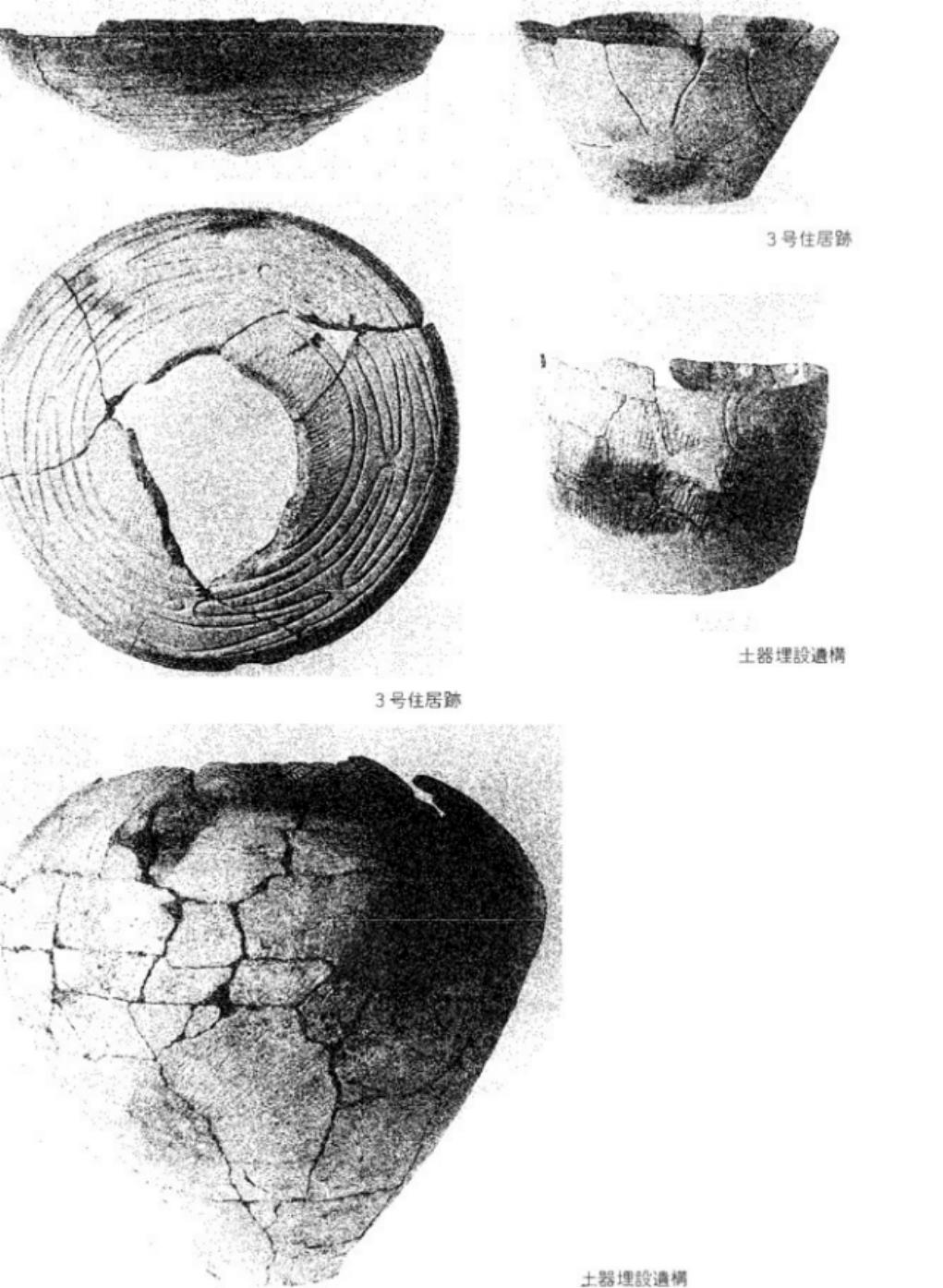
3号土塙（西→）



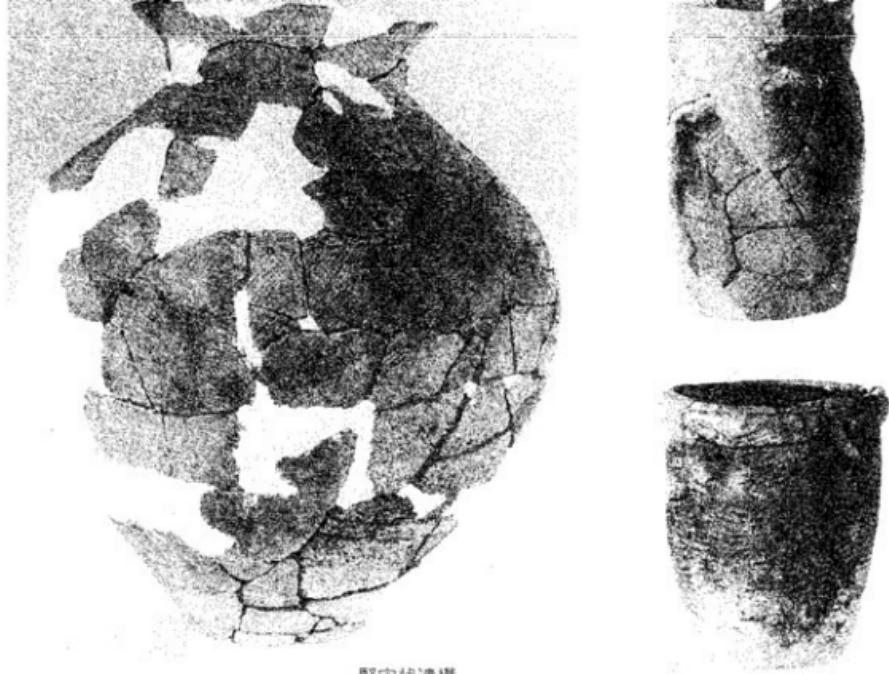
同上（北→）



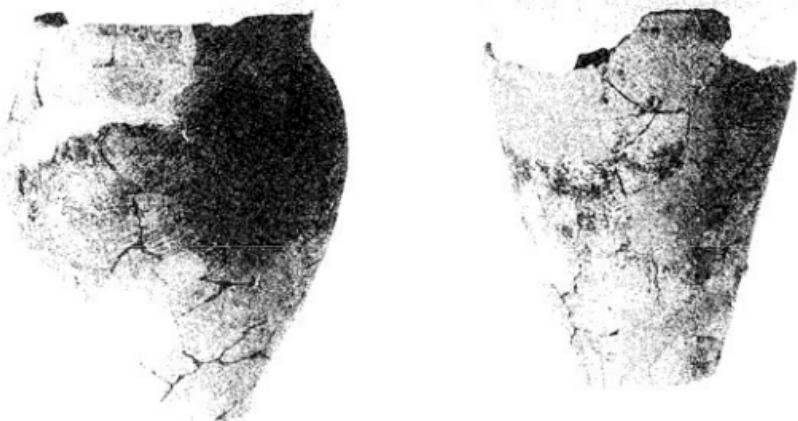
5号土塙（北→）



図版 4 造構内出土土器



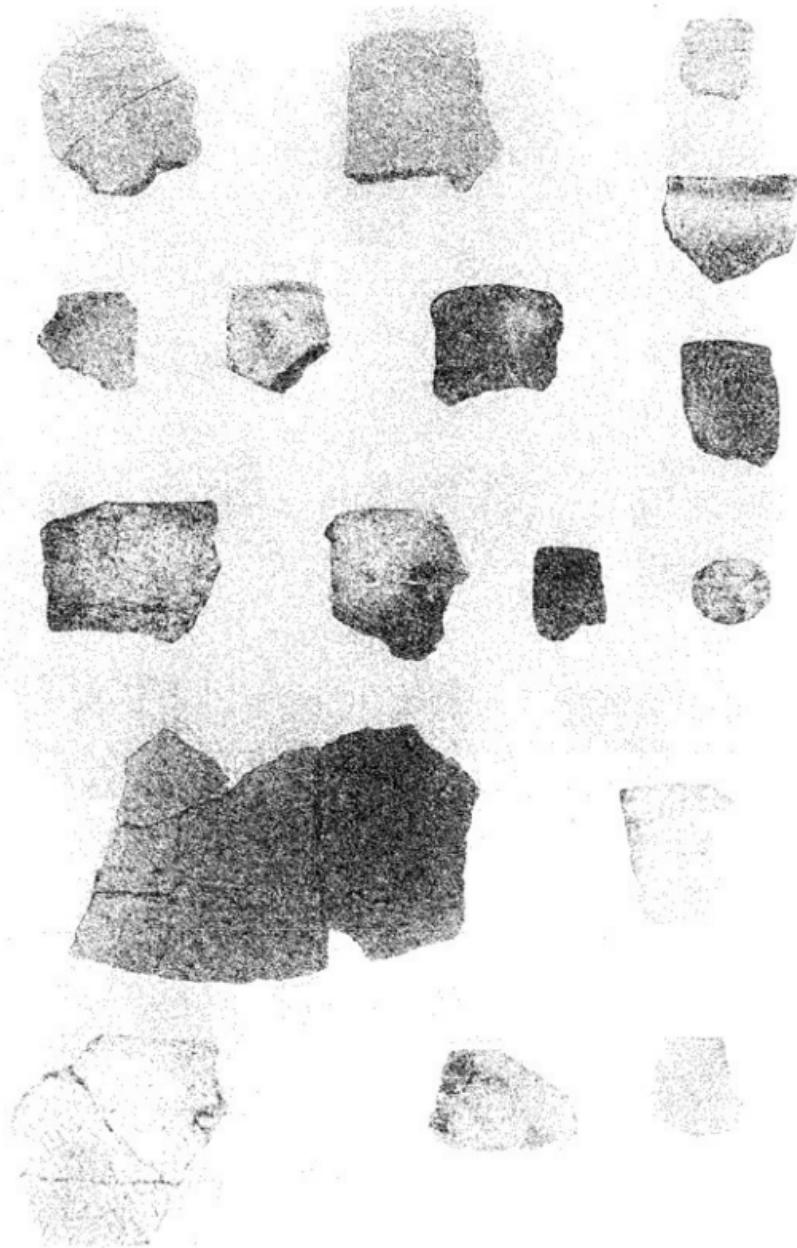
堅穴状遺構



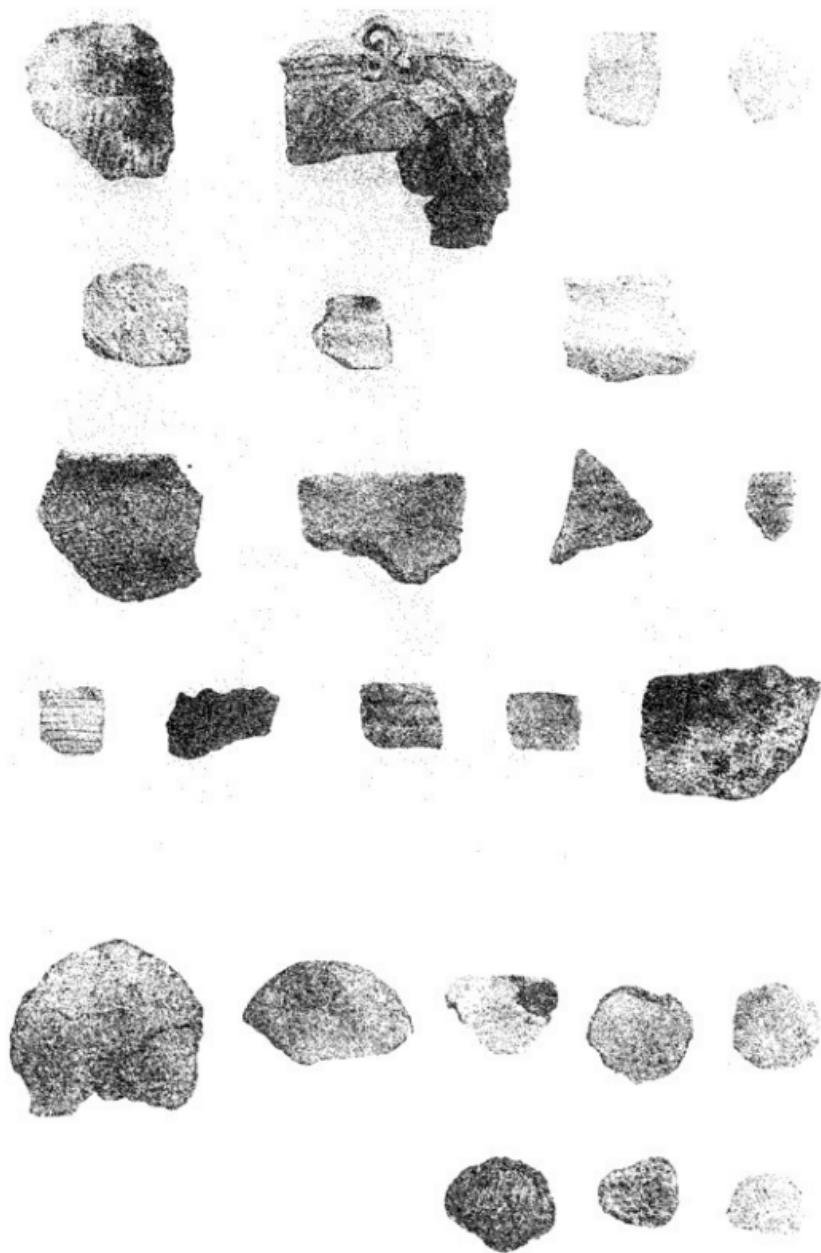
初痕付着土器



図版 6 遺構内出土土器・土製品

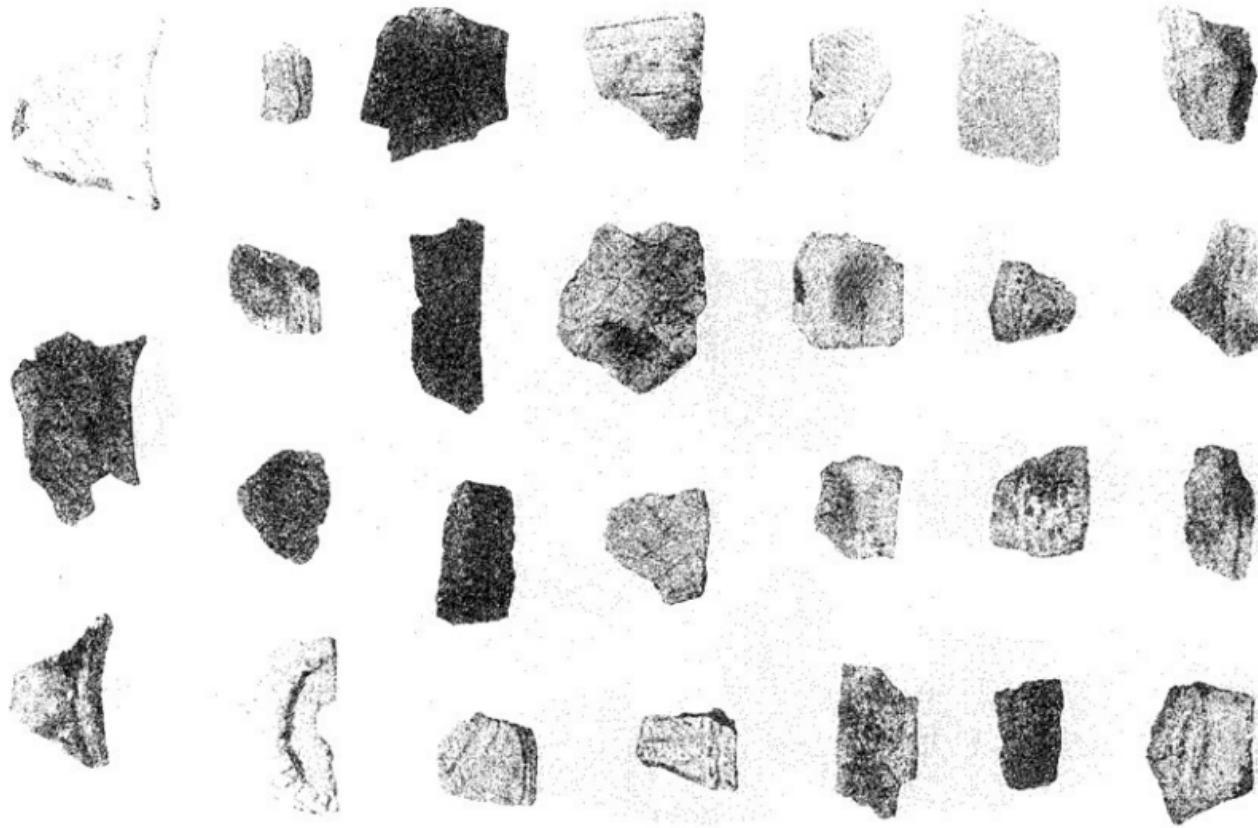


図版7 遺構内出土土器



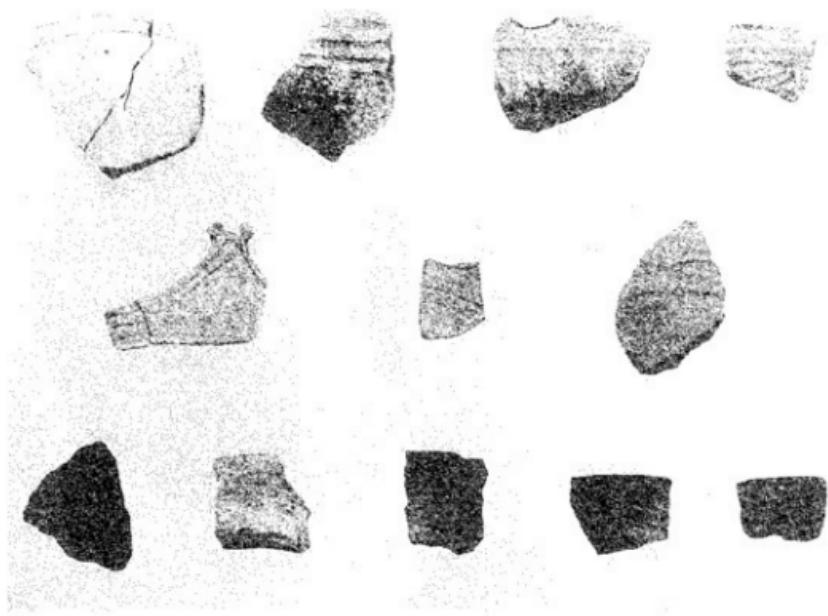
圖版 8 遺構內出土土器・土製品

圖版 9 遺物外出土土器

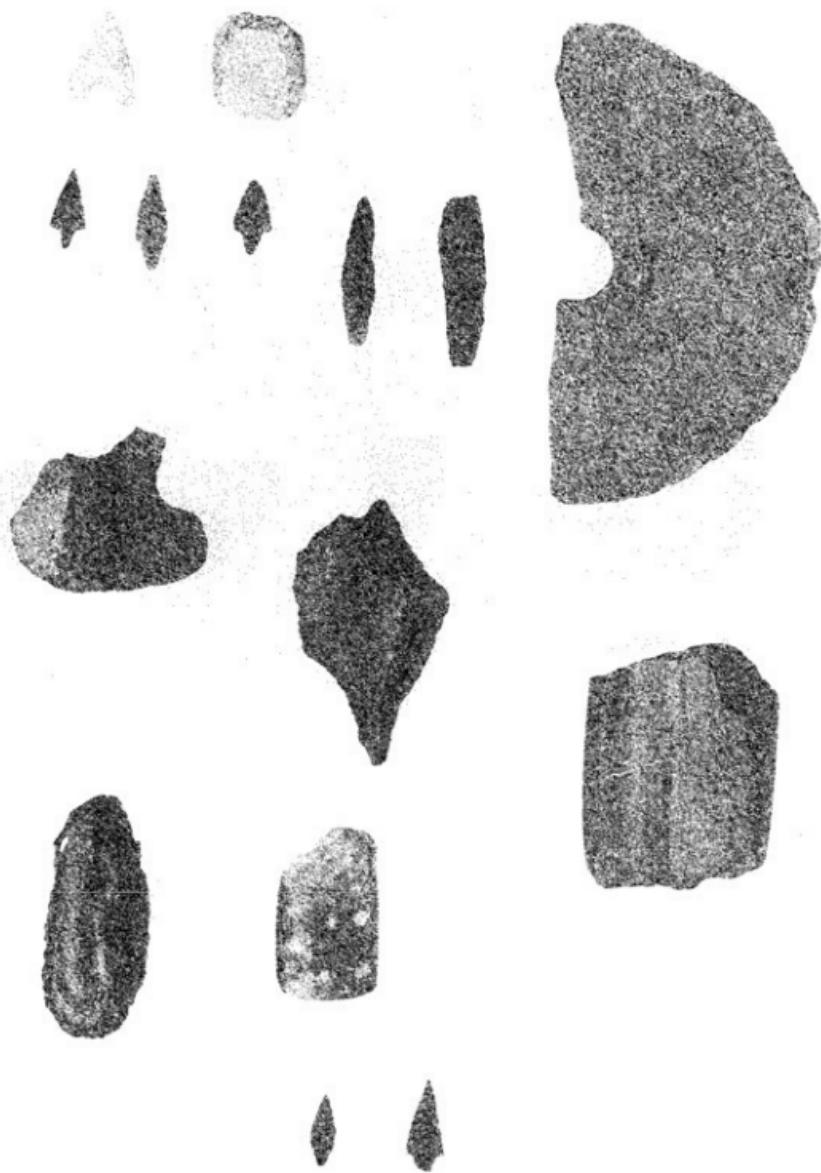




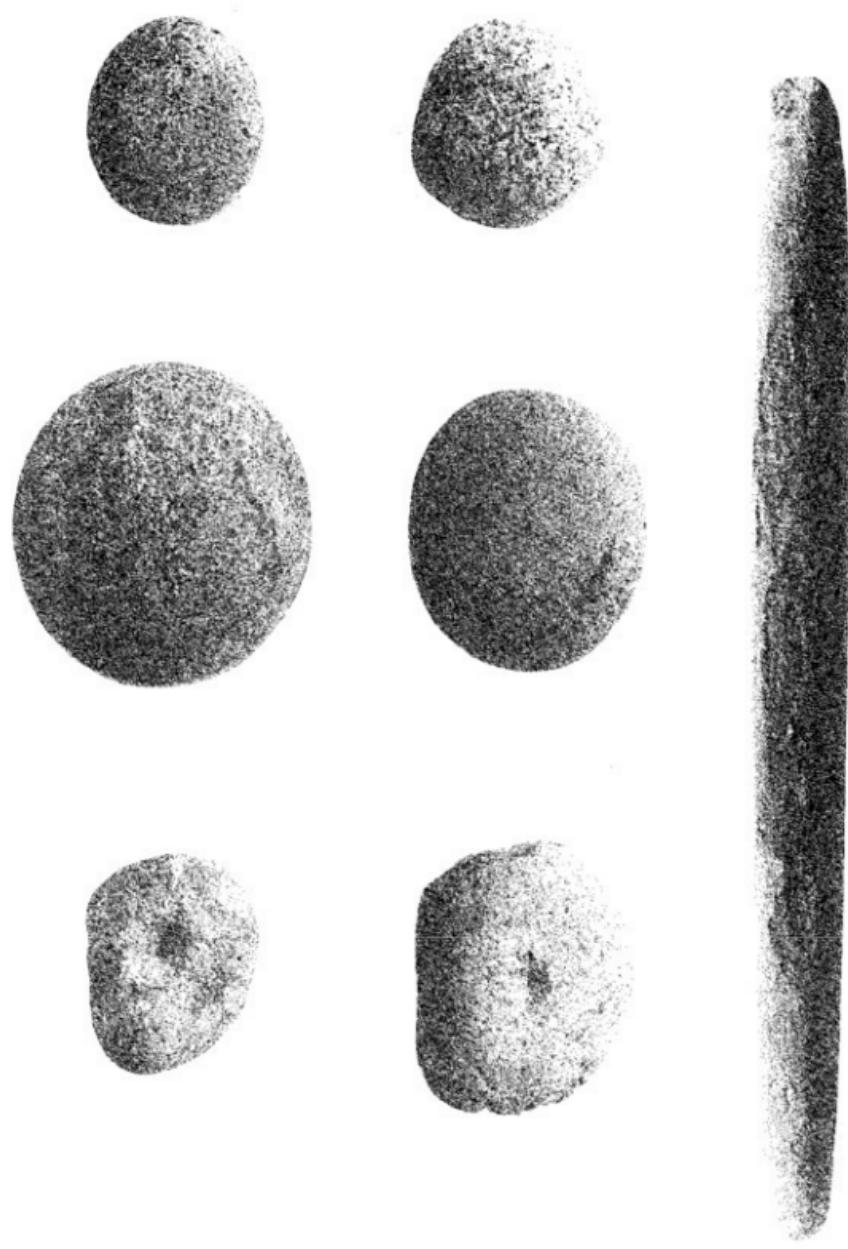
図版10 通横外出土土器



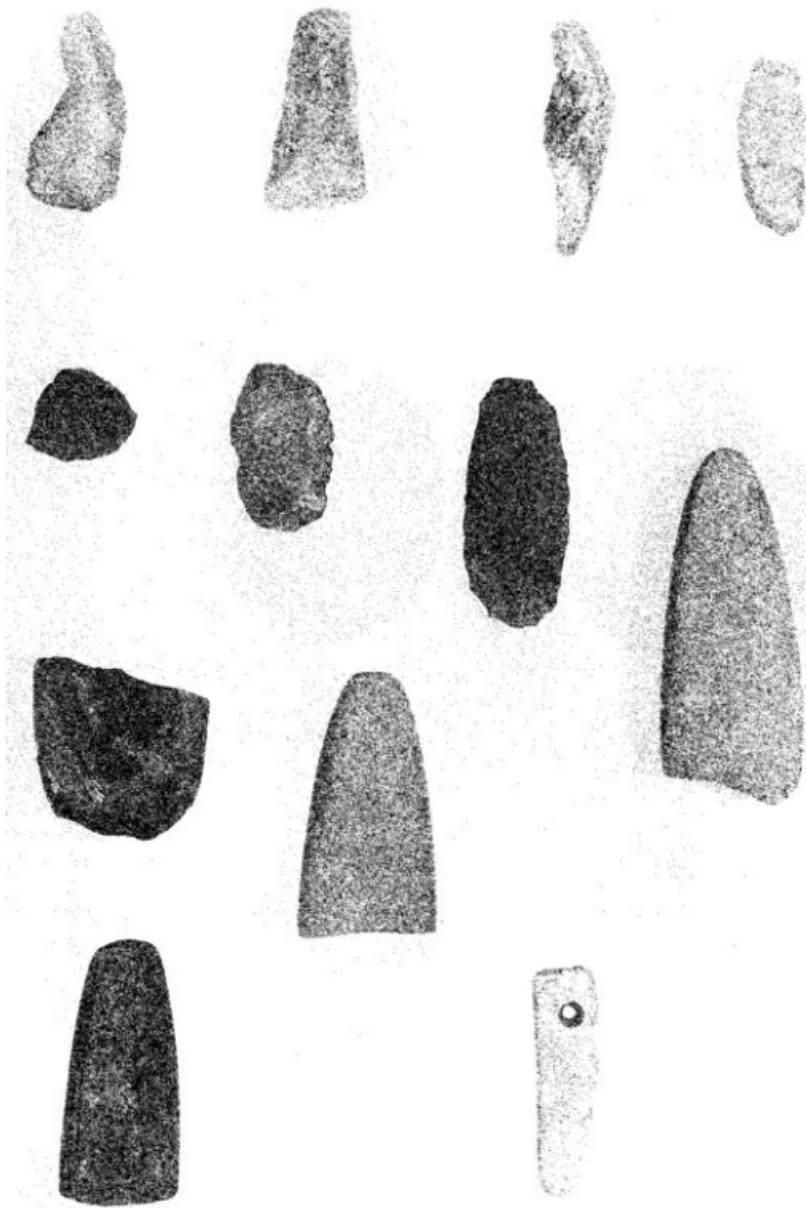
図版11 造構外出土土器



図版12 遺構内出土石器



図版13 遺構内出土石器

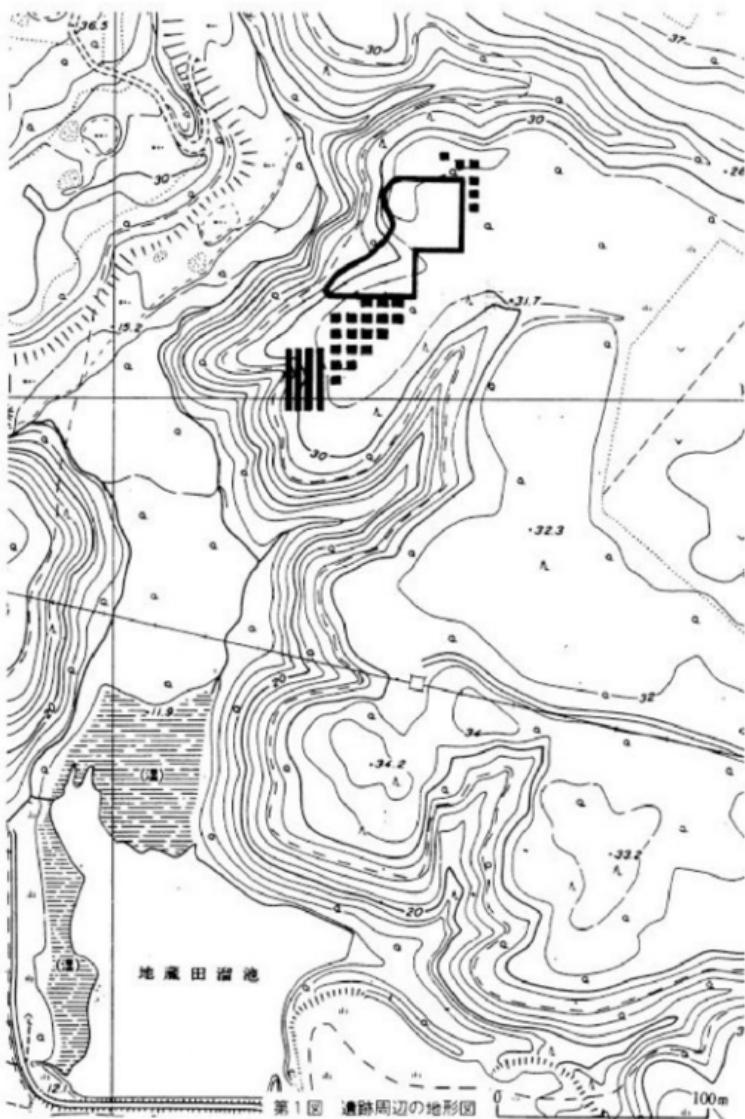


圖版14 遺構外出土石器・石製品

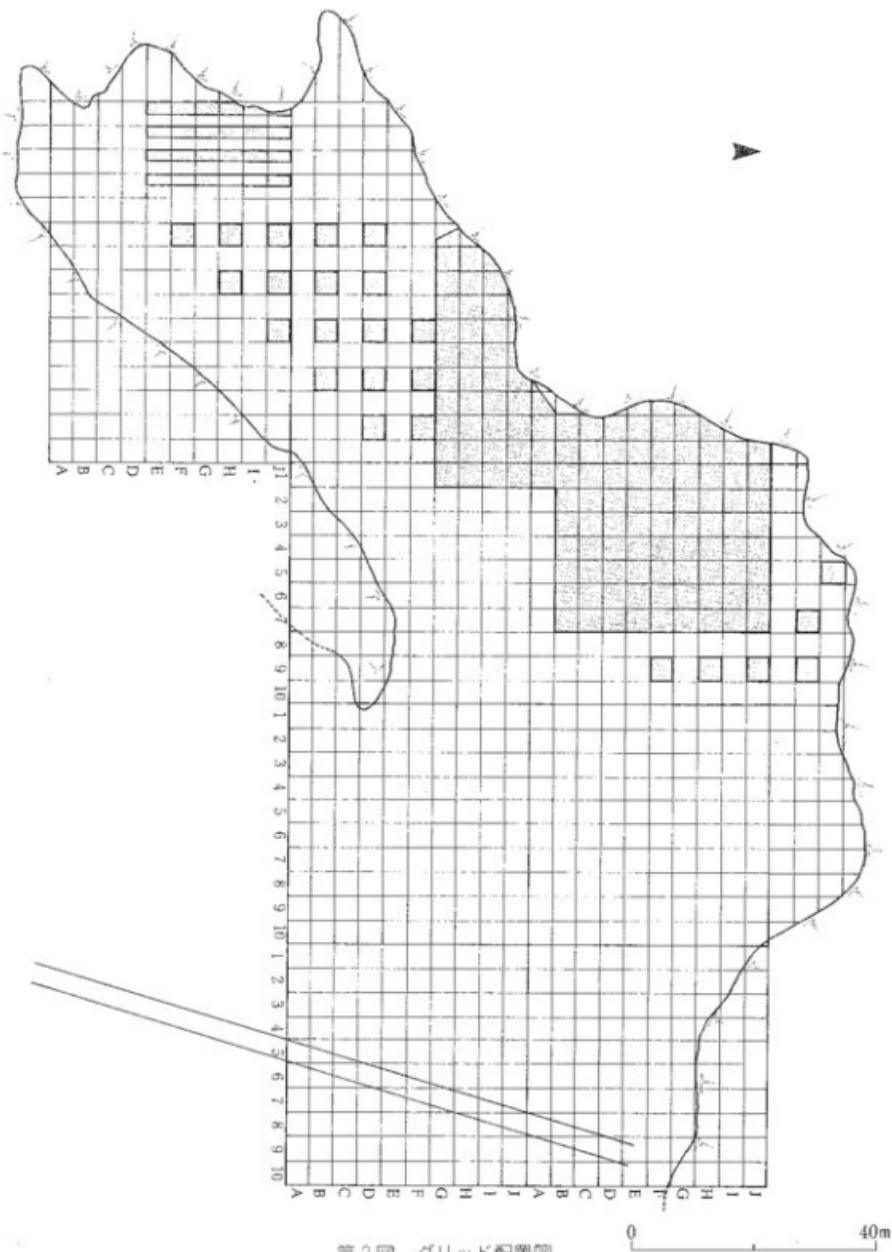


圖版15 遺構外出土石器

湯ノ沢C遺跡



第1図 遺跡周辺の地形図



第2図 グリッド配置図

遺跡の概観

末戸松本集落の北側に面した標高30m～32mの舌状台地の西側に位置している。検出された遺構は縄文時代中期の住居跡6軒、同期の土塁1基、晩期の土塁4基等である。縄文時代中期の遺跡は東方650mに野畠遺跡、南西方500mに湯ノ沢B遺跡があり、さらに南方250mに縄文時代中期および弥生時代中期の住居跡を検出した湯ノ沢A遺跡がある。

1号住居跡（第3図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸5.7m、短軸5.1mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土、黄褐色土、褐色土、黄褐色粘質土の堆積である。ビットは数個検出され、炉の両側の柱穴を除き、他ははっきりしない。炉は土器埋設部、掘り込み、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは側面が火熱を受けている。一段浅い掘り込みにはビットが認められる。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第12図1、第13図5～7）

1は炉埋設土器、5～7は覆土出土である。撚糸文を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。1は口縁部がやや外傾する深鉢形土器である。

石器（第16図1・2、第17図11・12）

1は石錐、2は搔器状石器、11は磨石、12はくぼみ石である。

2号住居跡（第4図）

調査区南側で検出された。

プランは直径約3mの円形を呈し、確認面からの深さは13cmで、壁はゆるく立ち上がる。覆土は黒色土、暗褐色土、褐色土の堆積である。ビットは住居内外に検出され、住居内4個と住居外のものが柱穴と考えられる。炉は石組部と掘り込みからなる。石組部は火熱を受け赤変している。掘り込みは1個の石とビットが認められ、壁に接する。床は平坦である。

出土遺物

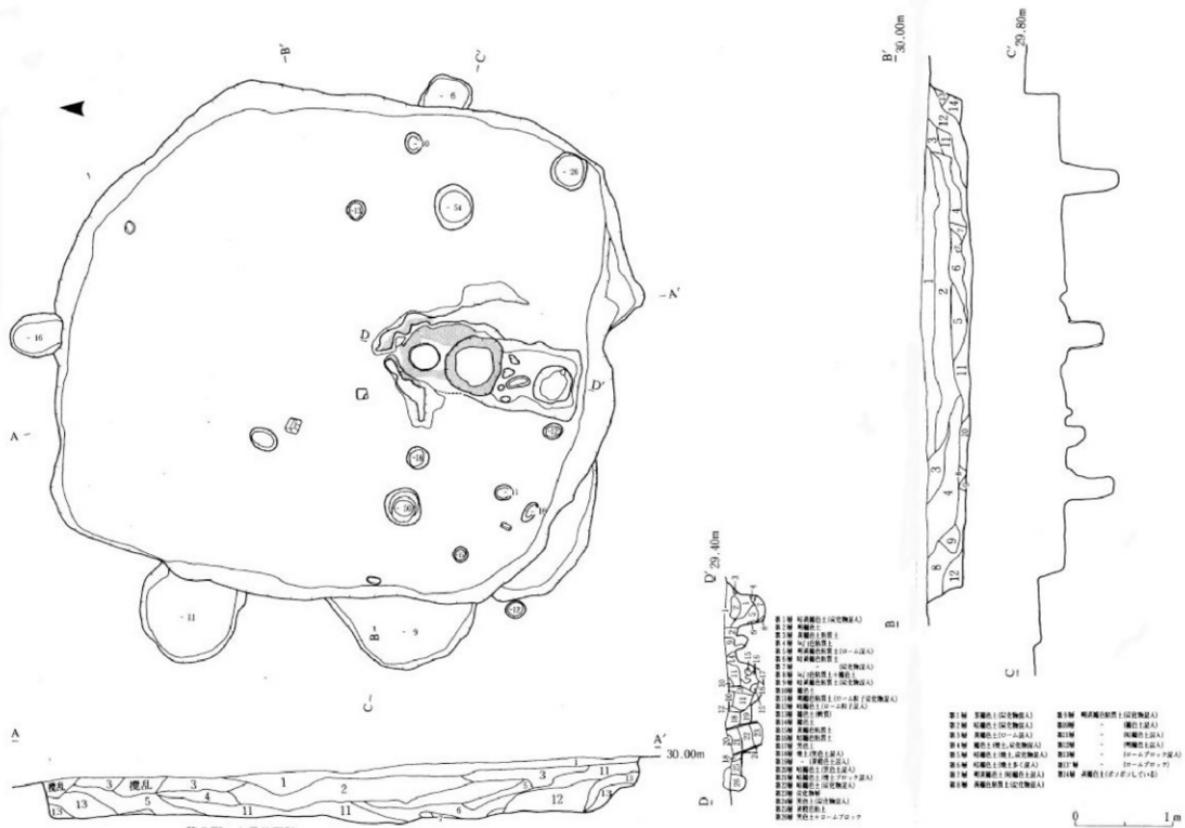
土器（第13図8～10）

10は炉覆土、8・9は覆土出土である。いずれもL字形斜綱文（縦位回転）が施され、8は折り返し口縁である。

3号住居跡（第5図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸2.5m、短軸2.2mの梢円形を呈し、西側の搅乱穴により壁が切られている。確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は褐色土、黄褐色土、暗褐色土の堆積であ



第3図 1号住居跡

る。ビットは住居内外に検出されたが、柱穴ははつきりしない。かほは土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胸部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。掘り込みは埋設土器側と底面に長さ20cm程の縁が検出された。この縁は赤化しており、石組みであったと考えられる。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第12図2、第13図11）

2はかほ埋設土器、11は覆土出土である。いずれも沈線区画の磨消帶を施すものである。2は深鉢形土器の胸部で、地文はRレ単節斜縞文（継位回転）である。

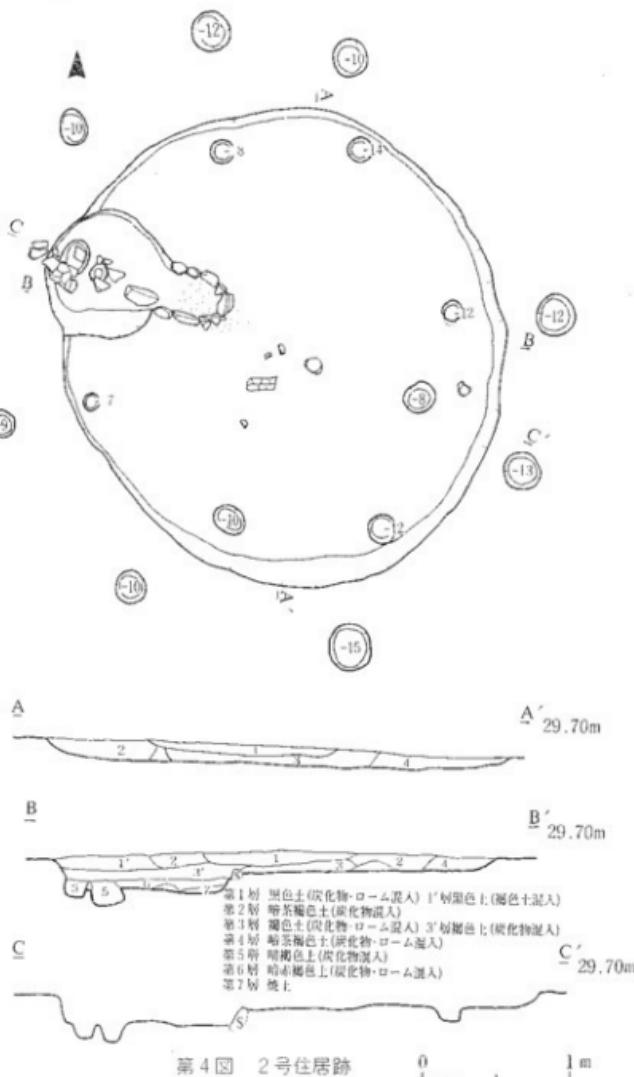
4号住居跡（第6図）

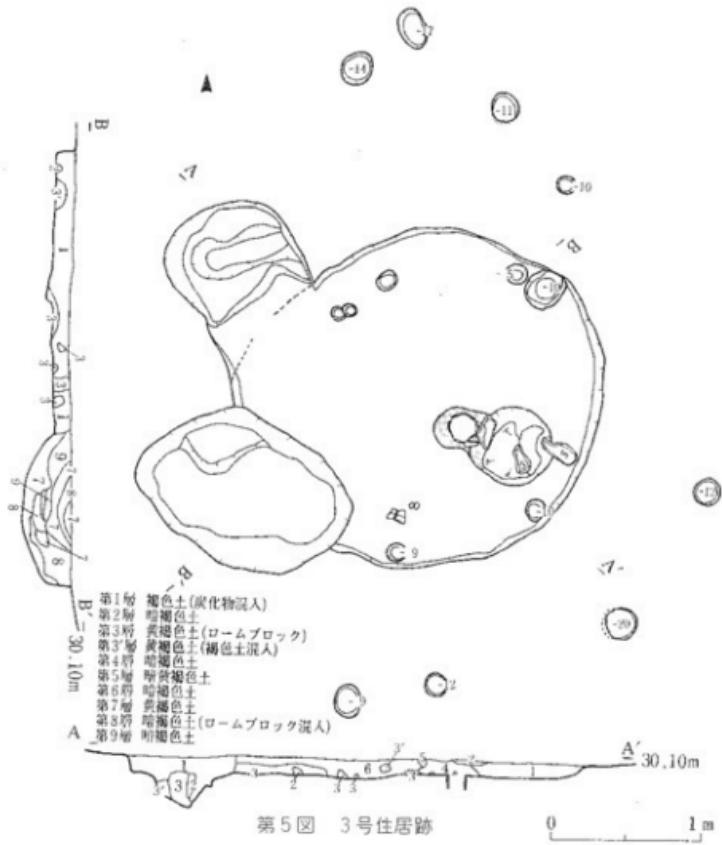
調査区北側で検出された。

フランは長軸2.8m、短軸2.5mの楕円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は褐色土上、黄褐色土上、暗褐色土上の堆積である。ビットは住居内外に検出され、住居内壁際と住居外のものが柱穴と考えられる。かほは土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は底部を欠く鉢形土器を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は埋設土器との間に2個の石を据えている。床は平坦である。

出土遺物





第5図 3号住居跡

0 1m

土器 (第12図3、第13図12・13)

3は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を施すもの、地文施文後に沈線を施すものである。3は口縁部がやや外傾する鉢形土器で、沈線区画の磨消帶はJ字状をなす。地文はR上単節斜縫文（継位回転）である。

石器 (第17図13)

脚石である。

5号住居跡 (第7図)

調査区西側で検出された。

プランは径約3mの円形を呈し、確認面からの深さは24cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土、褐色土、黒色土、暗褐色土の堆積である。ピットは住居跡内外に検出され、住居内4個が主柱穴、住居外が支柱穴と考えられる。かほ2ヶ所認められ、東側のかほが南側のかほを切ってい

る。南側のものは土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を正立して埋設してある。石組部は底面が火熱を受けている。東側の炉は土器埋設部と掘り込みからなり、土器埋設部は深鉢形土器を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変し、東側に石が1個認められた。掘り込みは底面が火熱を受けている。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第13図14～18）

14は炉（南側）、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を施すもの、数本の平行沈線を弧状に施すものである。

6号住居跡（第8図）

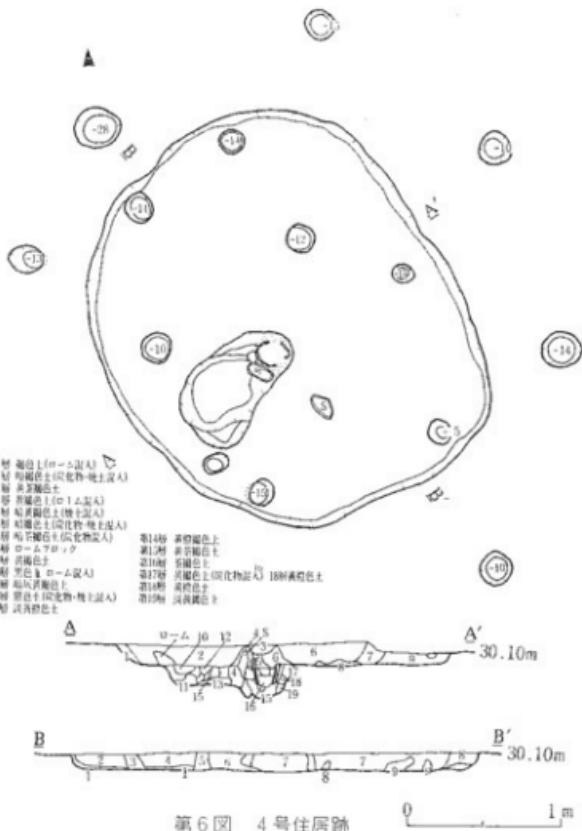
調査区西側で検出された。

プランは長軸4.7m、短軸3.5mの橢円形を呈し、北東部に張り出しをもつ。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土、赤褐色土の堆積である。ヒットは数個検出され、主穴は4個と考えられる。これは石圓土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石圓土器埋設部は底部を欠く深鉢形土器を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底い側面に石を組み、底面東側の石の組んでいない部分は火熱を受けている。掘り込みは一段浅く壁に接し、底面から鉢形土器が出土した。床は段がつき、北側が低い。

出土遺物

土器（第12図4、第13図19～29、第14図30）

4は切り込み底面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を施すもの、刻線を葉脈状に施すもの、垂下する隆起線の両側に刺突を施すもの、撚糸文を施すものである。4は口縁部がすぼむ鉢形土器である。沈線区画の磨消帶は地文より浮き出ている。2単位の文様構成で、口縁部と胴中央



第6図 4号住居跡

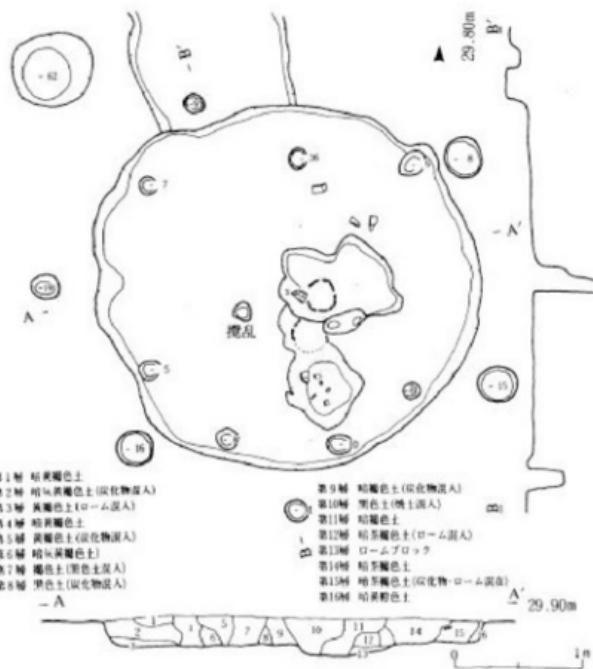
部に橋状把手
が合計4個付
く。

**土製品（第
14回31）**

再利用土製
品（内盤状土
製品）である。

**石器（第16
回3～10）**

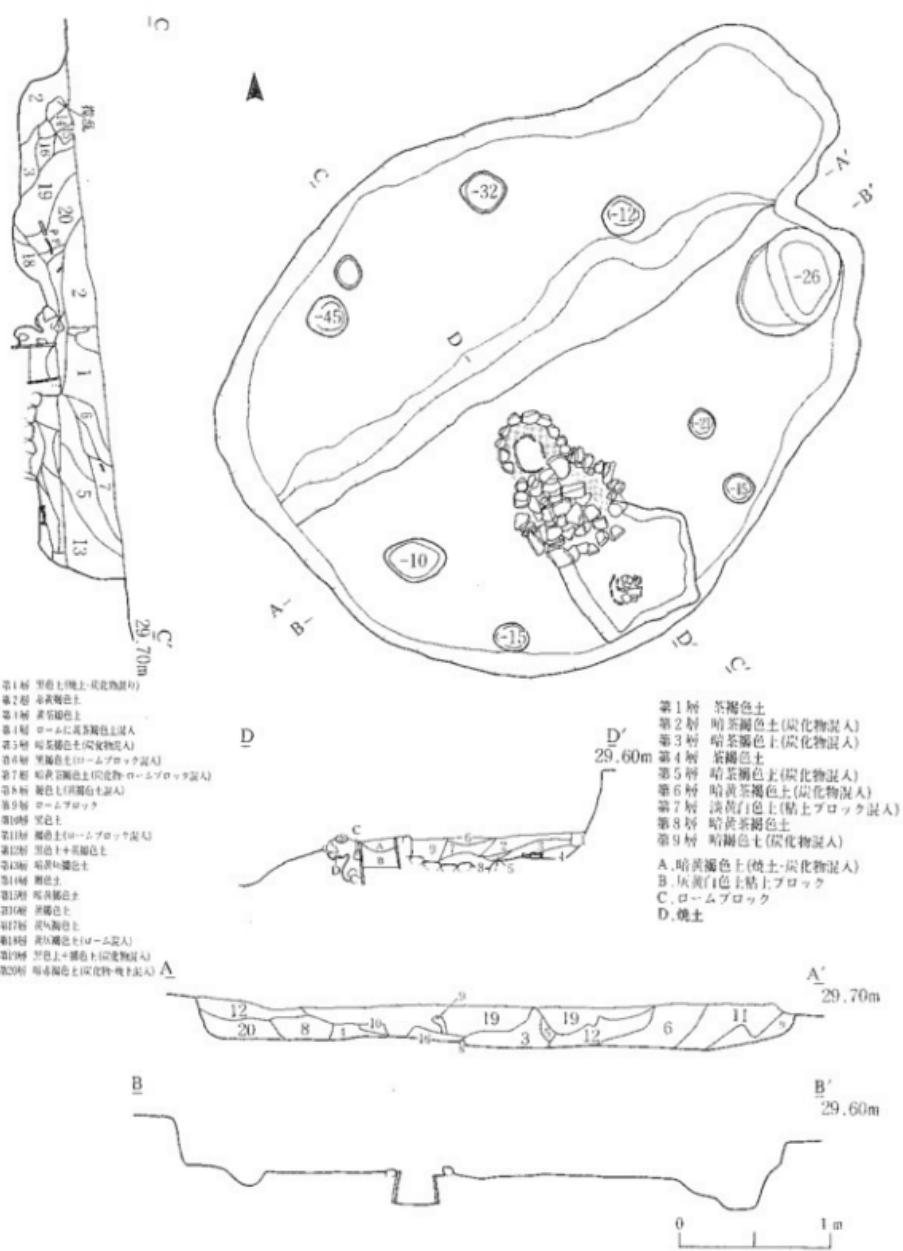
3は石錐、
4・5は艇型
石匙、6・7
はヘラ状石器
8・9は搔器
状石器、10は
磨製石斧であ
る。



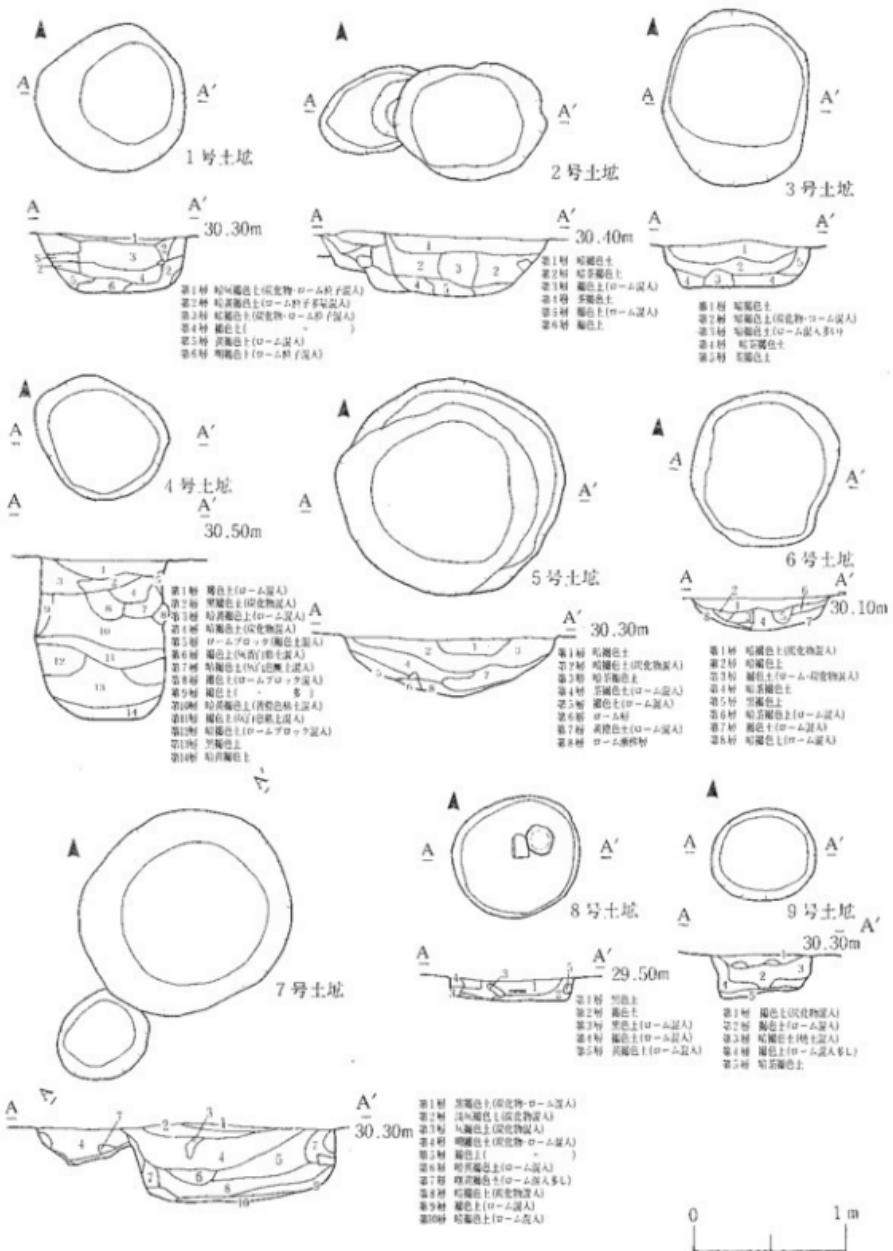
第7図 5号住居跡

土塙一覧表

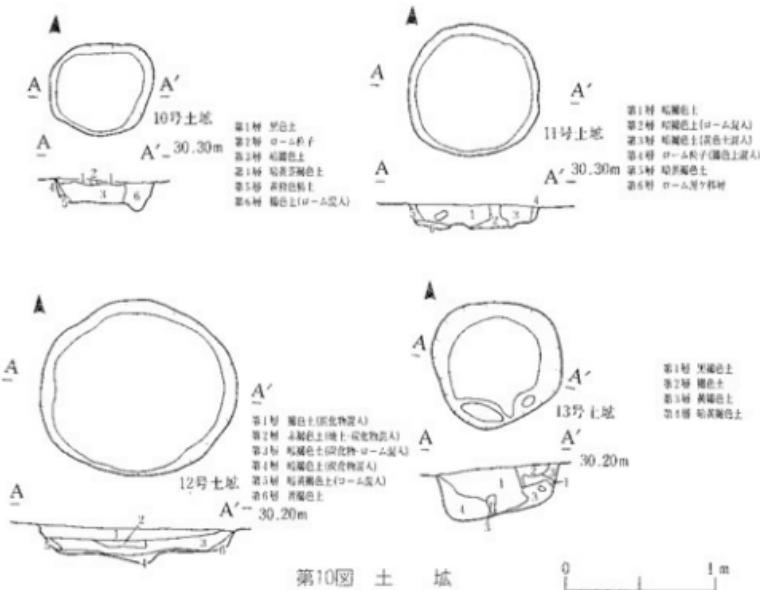
土塙番号	規 模 (cm)			平面形	断面形	出土 遺物
	長 軸	短 軸	深 さ			
1	102	98	41	円 形	鍋底状	第14回31～36, 第17回35 縄文時代中期
2	101	68	39	椭 圆 形	鍋底状	第14回31～36 縄文時代中期
3	116	95	30	椭 圆 形	鍋底状	第14回31～43 縄文時代中期
4	90	75	106	椭 圆 形	袋 状	第14回44～45
5	151	145	38	円 形	鍋底状	第14回46～48 縄文時代後期
6	104	96	20	円 形	鍋底状	
7	145	130	51	円 形	袋 状	第14回49～50 縄文時代後期
8	86	84	13	円 形	鍋底状	第14回51
9	69	61	37	円 形	鍋底状	第17回14、16
10	73	61	15	円 形	鍋底状	第14回52
11	90	85	15	円 形	鍋底状	
12	130	117	23	円 形	鍋底状	第14回53、54
13	89	85	33	円 形	鍋底状	第14回55、56 第19回17、18



第8図 6号住居跡



第9図 土 壯



第10図 土 塚

土器埋設遺構 (第11図)

調査区の北側、7-Bトレンチで検出された。掘り方は径42cm、深さ27cmの円形を呈し、挿鉢状に下部が細くなる。底面より約2cmほど上方に底部を打ち欠いた土器が、北へやや傾く状態で据えられている。この土器は口径37cm、現存高37cmを計り、地文には羽状罫文を施している。

出土土器

遺構内、遺構外の土器について、群に大別し、類に細別して述べてみた。

1群土器

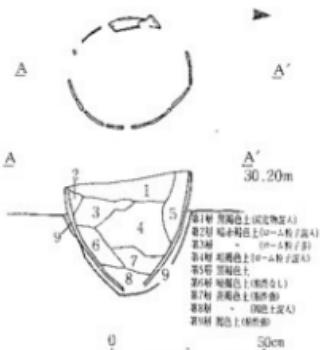
1類 (第19図72・73・75)

口縁部文様帯に粘土紐を貼り付け、その隙縫及び文様帯に撲糸圧痕を施すものである。口縁部がやや外傾する深鉢形土器である。

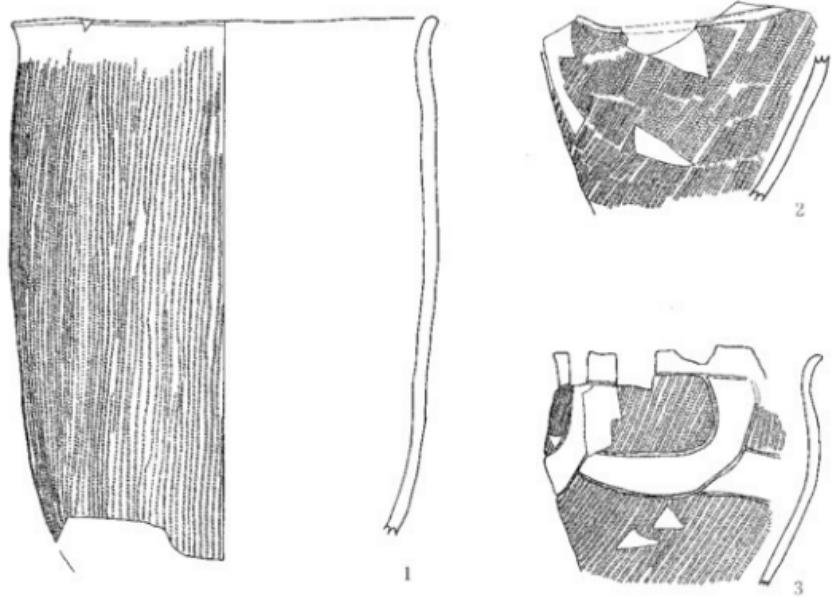
2類 (第19・74)

粘土紐を貼り付けその両側を撲糸圧痕で調整するものである。文様は渦巻状をなし、器形は鉢形である。

3類 (第13図6・11・14・20~25・28・29、第14図36、第19図80~84)



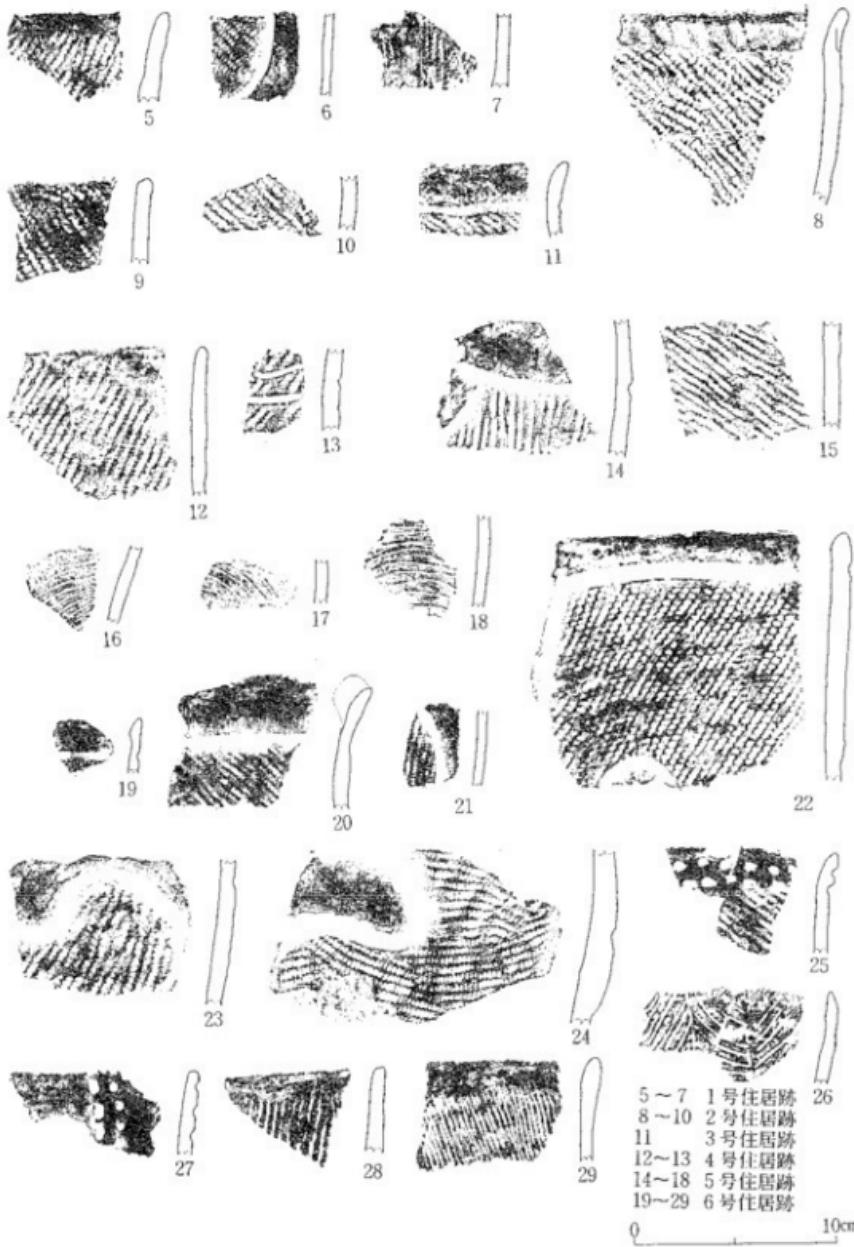
第11図 土器埋設遺構



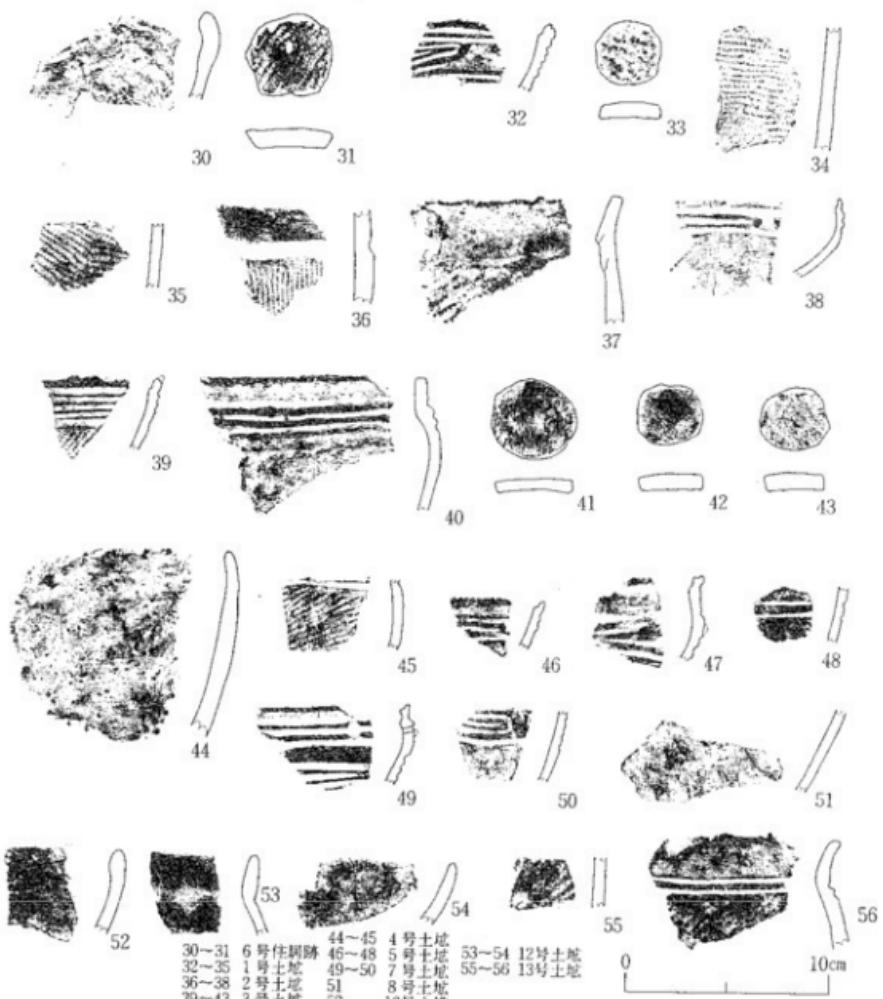
- 1 1号住居跡
2 3号住居跡
3 4号住居跡
4 6号住居跡

0 10cm

第12図 遺構内出土土器



第13図 造構内出土土器



第14図 遺構内出土土器

沈線区画の磨消帯を曲線的に施すものである。磨消帯が地文部より浮き出し橋状把手の付くもの、刺穴を加節するものもある。器形は深鉢形・鉢形である。

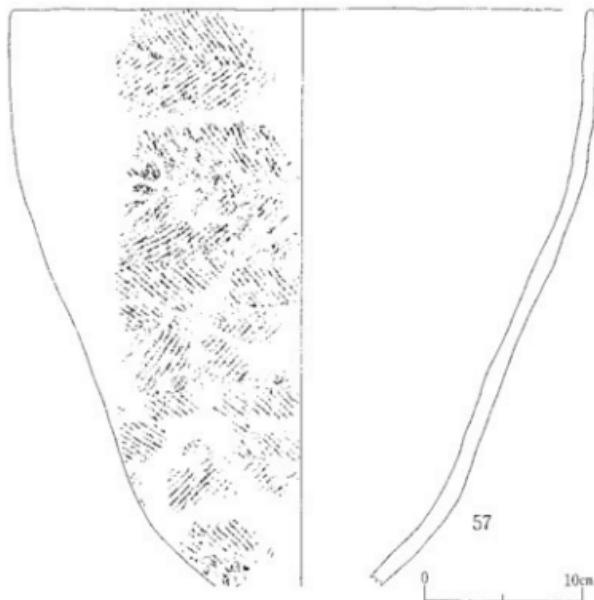
4類（第19図87~89）

半截竹管状工具内面による半隆起縫を、直線・格子目状に施すものである。器形は鉢形である。

5類（第18図58・59、第19図70・71）

本群で上記以外のものを一括した。58は4個の大きな突起をもつ鉢形土器である。文様は隆起線、

半隆起線、刺突で構成される。隆起線は刺突を施し、突起頂部を結ぶ中間に縫が付く。半隆起線は突起頂部と突起中間の縫より垂下するもので、途中に円形文を施したり刺突を施す。59は4個の突起をもつ鉢形土器である。頸部隆帯に刺突、突起頂部より垂下する隆帯に撲糸压痕を施す。突起頂部を連絡するように、また、頸部隆帯の上方に半隆起線が施される。これらは地文施文後に行っている。70は小突起部で、表裏面に粘土



第15図 遺構内出土土器

縫を貼り付け、その間と口唇部には撲糸压痕を施す。71は口縁部隆起線間に、刻線によるぐの字状、弧状・曲線文を施すものである。

2群土器（第18図60、第19図90～95）

2～3条1単位の刻線及び沈線を施すものである。文様は直線・曲線的に施され、器形は鉢形である。

3群土器

1類（第18図62）

半齒状文、入組文の施される注口土器で、かなり大形である。

2類（第20図96～99）

刻目文、平行沈線の施されるものである。浅鉢型・鉢形土器などがある。

3類（第20図100～107）

2～3条の平行沈線を施すもので、口唇部に刻目を施すもの、2個1対の小突起をもつものがある。浅鉢形・鉢形土器などがある。

4類（第14図38～40、45～50、第18図61、65～68、第20図108～126）

上字文の施されるものである。口唇部に2個1対の小突起をもつもの、口縁部の沈線間に2個1対の粘土粒をもつものがある。浅鉢型・鉢形・壺形土器などがある。

5類（第14図32、第18図63、第20図127～136）

変形工字文の施されるものである。口唇部に突起、または2個1対の小突起、口縁部に2個1対の粘土粒をもつものがある。浅鉢形・鉢形・台付鉢形土器などがある。

6類 (第21図137~145)

口唇部に繩文を残し、口縁部に2~3条の平行沈線または磨かれて無文帶となるものである。口唇部に突起をもつもの、刻みを施すものがある。器形は鉢形である。

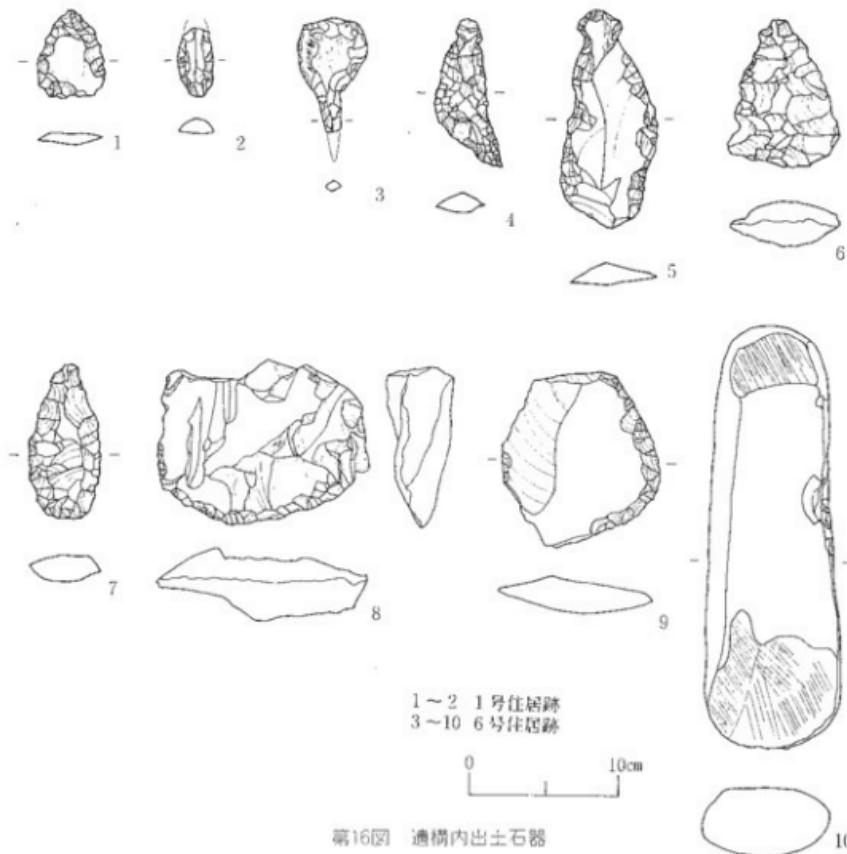
4群土器

上記以外のもの。また地文のみのものを括した。

1類 (第15図57、第18図69)

57はL R・R L繩文原体を使用した羽状繩文である。口径37cmを計る。69は単軸格条体回転文で口縁部付近は弱くナデている。

2類 (第13図16~18、26)



第16図 遺構内出土石器

刻線を施したもので、16～18は數本を弧状に、26は葉脈状に施す。

遺構外出土遺物

土製品（第21図146～153）

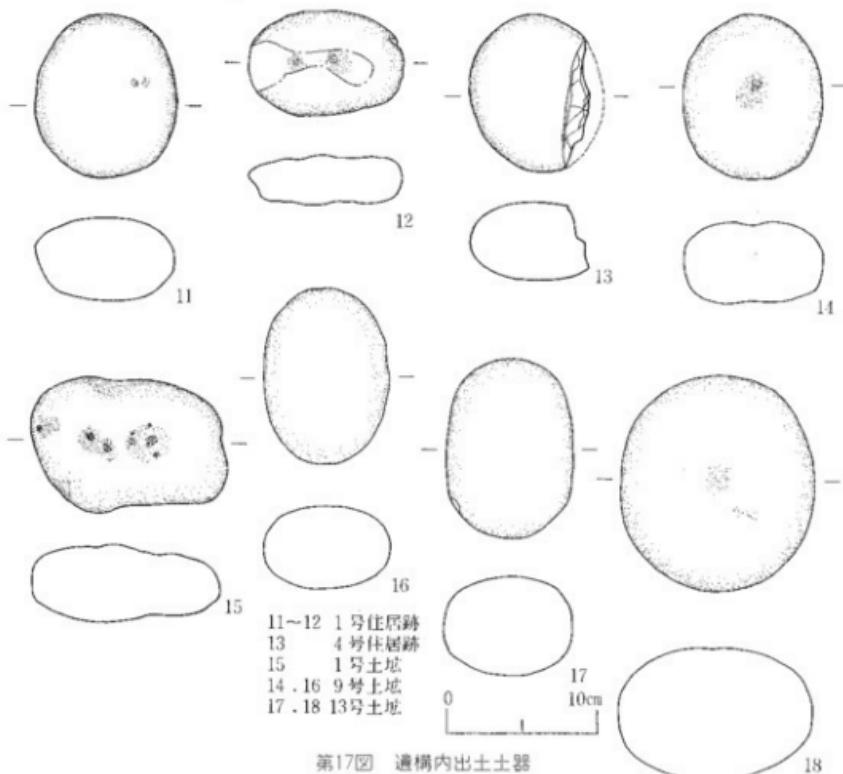
146～152は再利用土製品（円盤状土製品）である。153は土偶脚部である。

石器・石製品（第22～25図）

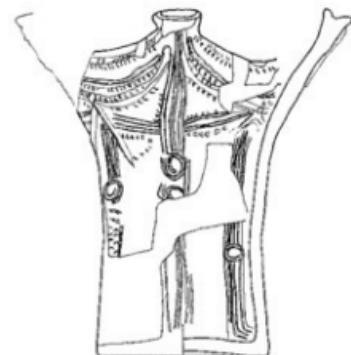
19・22是有茎石鏽、24は無茎石鏽である。25是有舌尖頭器で先端部が欠損している。26・27は縦型石匙、28・29は横型石匙である。30～39はヘラ状石器である。40～43は搔器である。44～46は削器である。47は石庖丁状の石器で、両面から押圧剥離を施して刃を作っている。48は打製石斧である。49～53は磨製石斧で、49はいわゆる乳棒状石斧で、断面が橢円形をなし、頭部が細くなっている。54は石皿、55～60はくぼみ石、61～73は磨石。74は石錘で両端を欠いて作り出している。75は湾曲した自然石の一端に擦切りを施した石製品である。岩偶もしくは装飾品であろうか。

その他の遺物（第25図76）

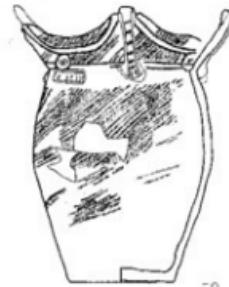
76は扁平な碟に刻線がみられる。一端が欠けている。



第17図 遺構内出土土器



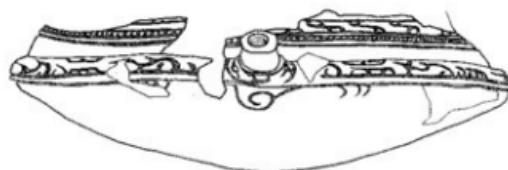
58



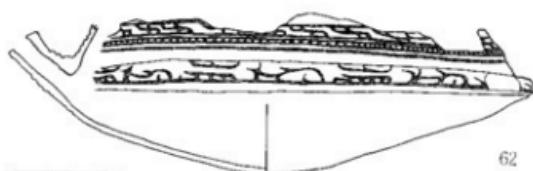
59



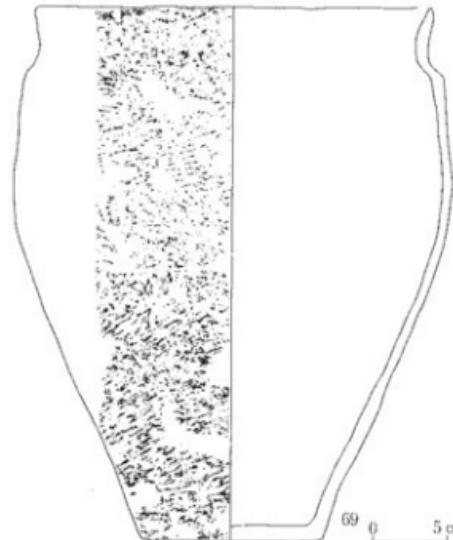
60



61



62



63 0 5cm



64



65



66

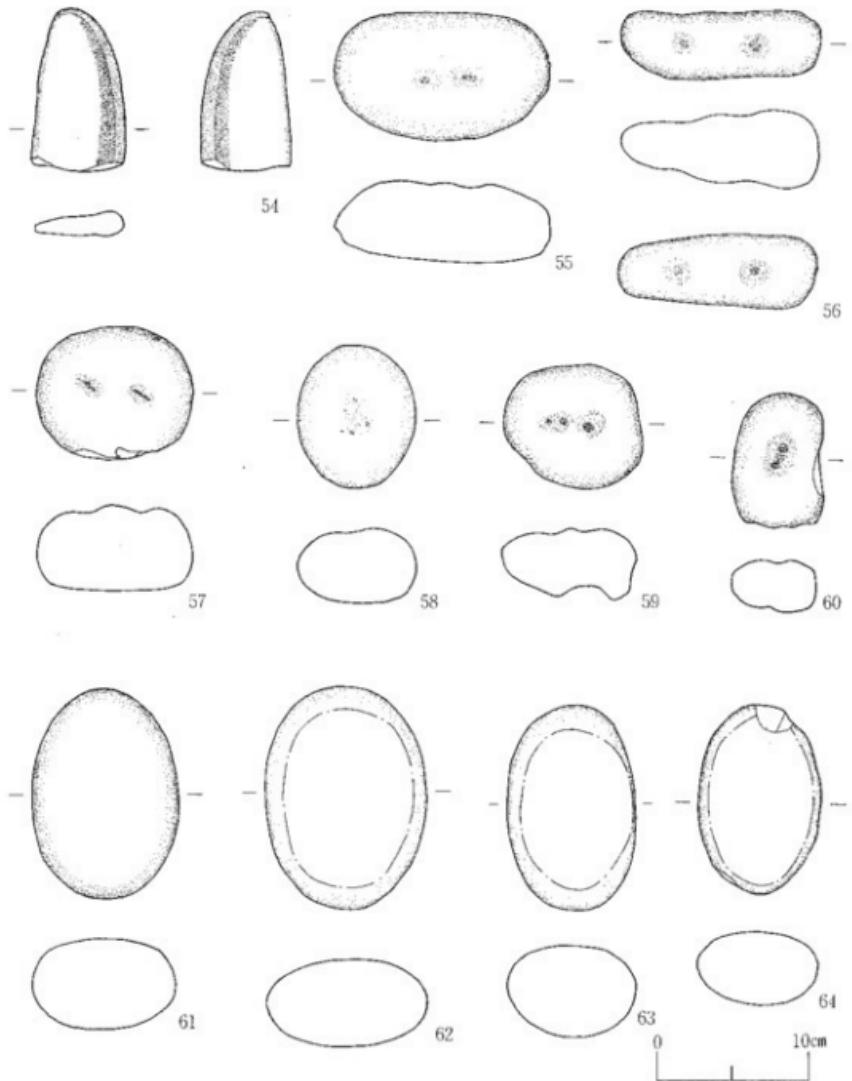


67

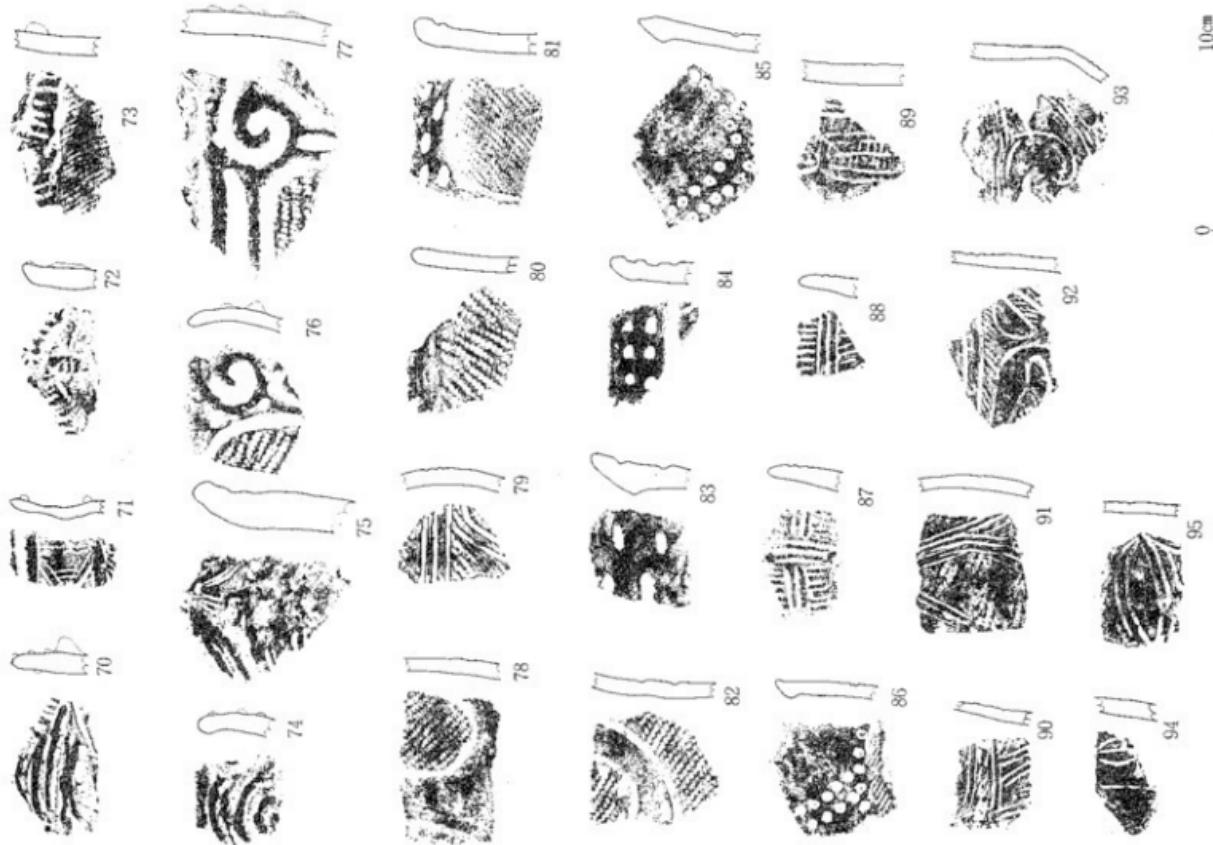


68

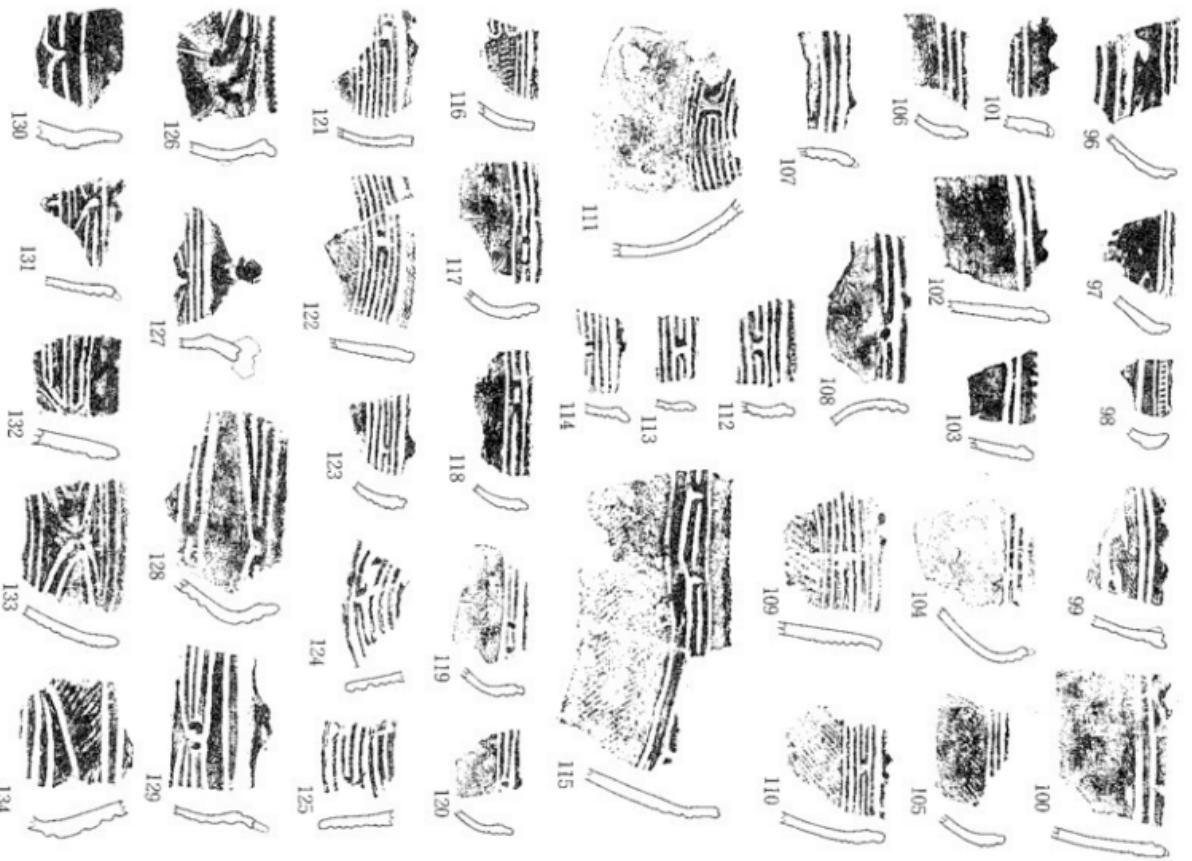
第18図 遺構外出土土器



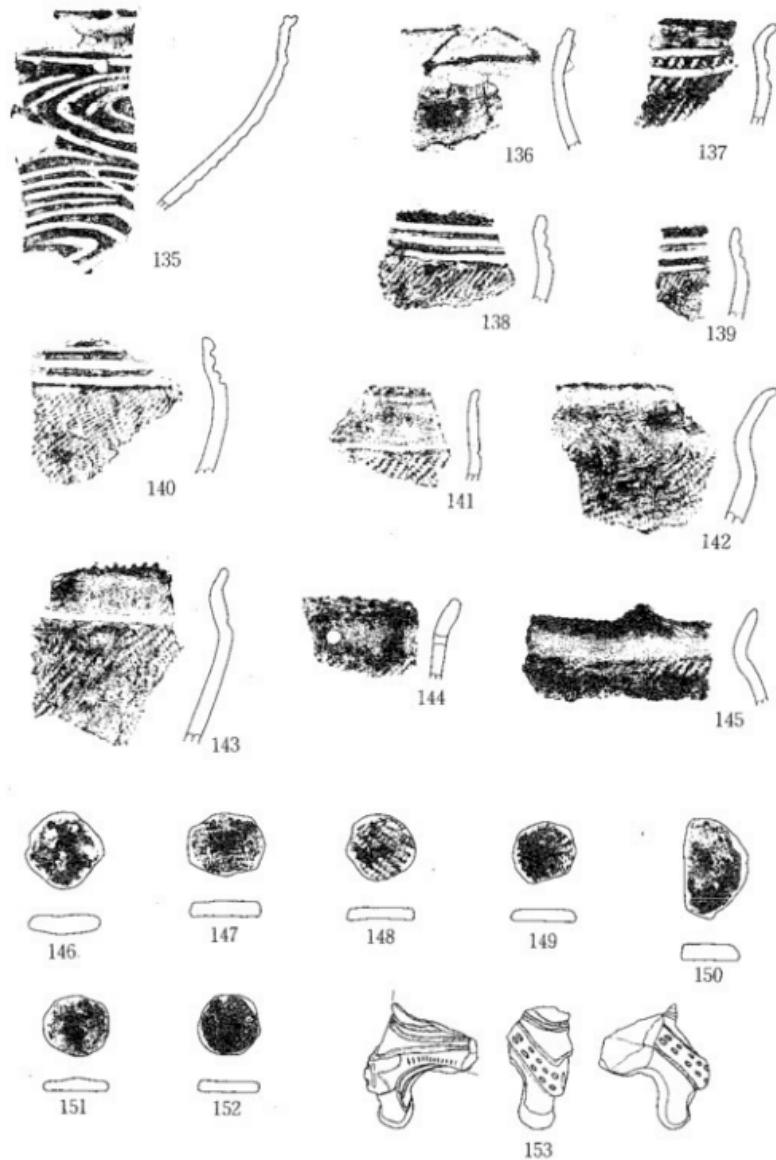
第24図 遺構外出土石器



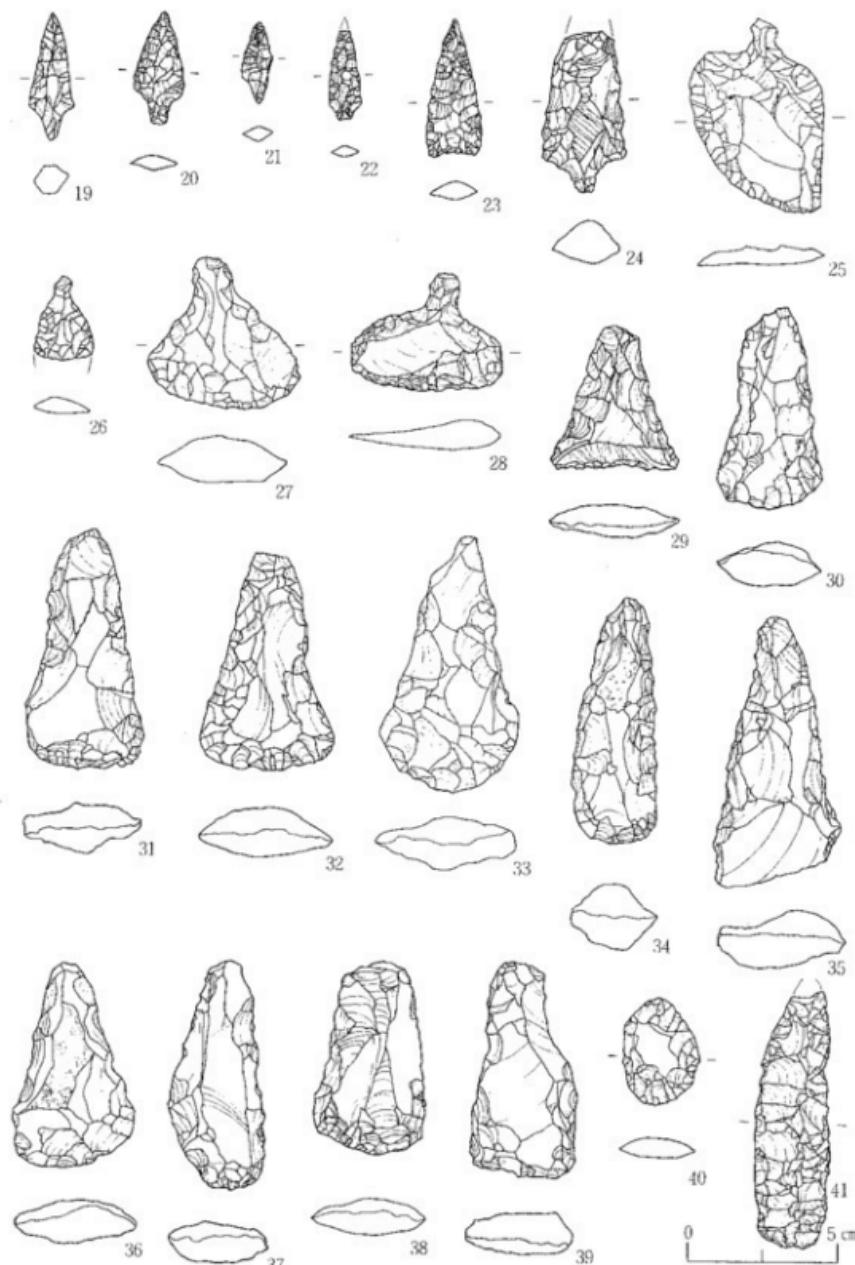
第19圖 遷都外出土土器



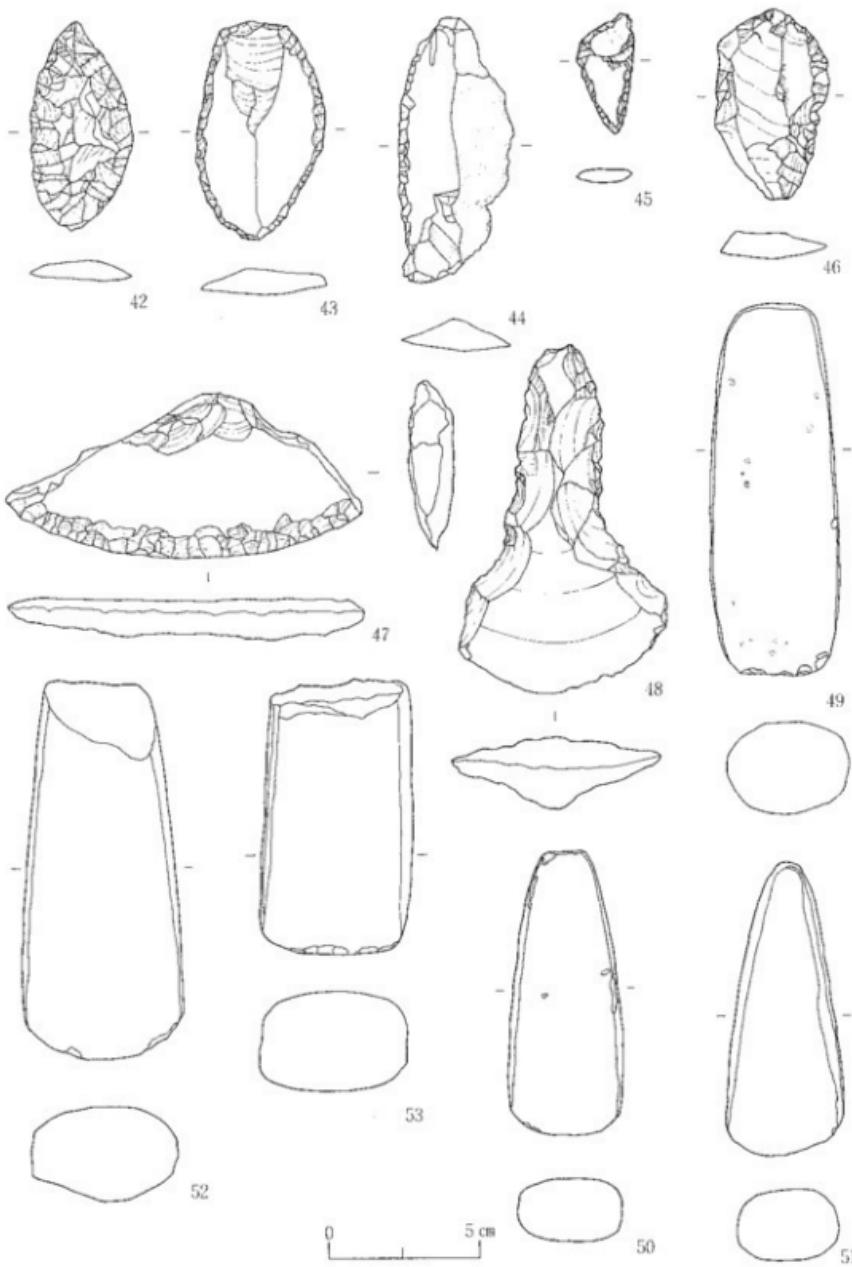
第20图 遗物出土土器



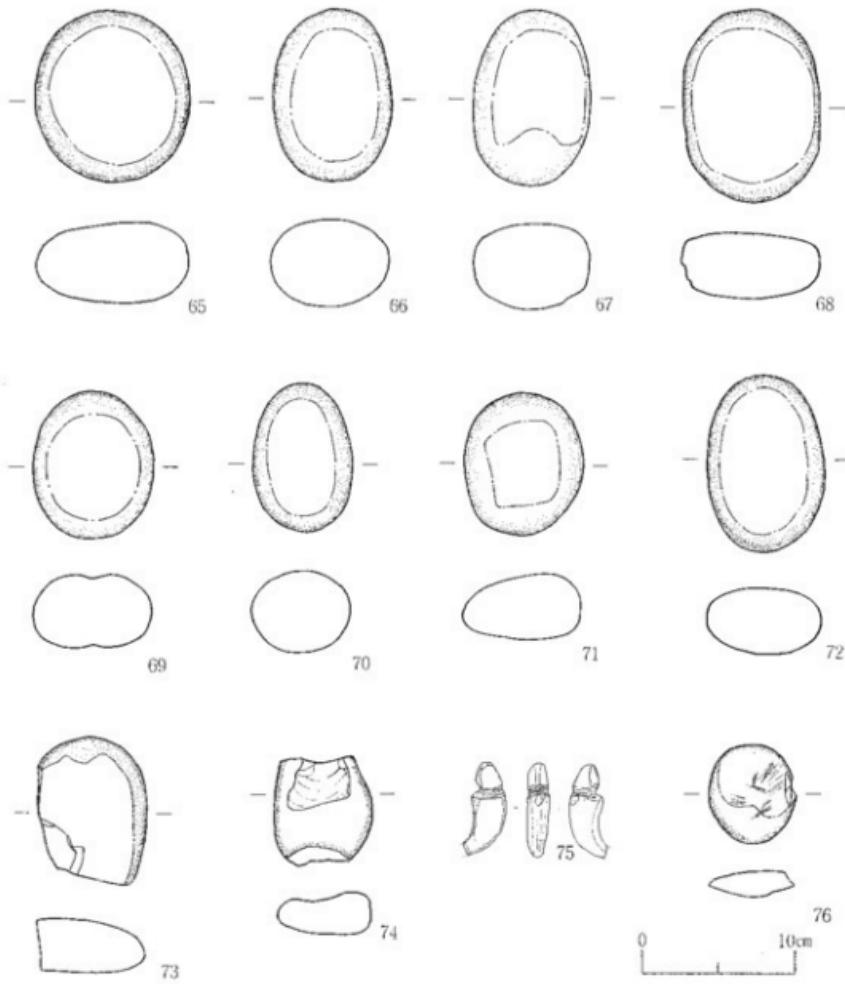
第21図 遺構外出土土器



第22回 造構外出土石器



第23図 遺構外出土石器



第25図 遺構外出出土石器・石製品

まとめ

遺構について

本遺跡で検出された遺構は既述の通り、住居跡6軒、土塁13基、土器埋設遺構1基である。住居跡は、南面する舌状台地の北西側縁部に沿い南北に検出された。出土土器から大木10式期に位置づけられるものである。住居跡間に重複関係はなく、また埋設土器からも住居間相互の関係は不明である。

かには次の3形態がみられる。①土器埋設炉—1・3・4・5号住居跡 ②石組炉—2号住居跡 ③土器埋設複式炉—6号住居跡。1・3・5号住居跡炉周辺に検出された礫は、火然を受けたものも含まれており、石組の可能性をうかがわせる。

本遺跡検出の住居跡における主柱穴は、1号住居跡を除き、いずれもしっかりと柱穴は検出されていない。しかし、壁外に柱穴を構築することが、本遺跡における住居跡の特徴としてとらえることができる。

土器について

土器は大きく1群土器、2群土器、3群土器、4群土器に分類して報告した。

1群1類は口縁部文様帶に隆帯および撲糸圧痕が施され、山形口縁をもつことなどから円筒上層a式に比定されるものである。2類はキャリバー形を呈する土器で、口縁部の隆帯に沿って撲糸圧痕を施すもので、大木8a式に比定されるものである。3類は大木10式に比定されるものである。4類は半降起線文を用い、平行沈線状の線をあらわす土器群で、北陸地方の古串田新式に属するものと考えられ、中期後葉に比定されるものである。5類は前期末葉～中期前葉の土器である。

2群は十腰内I式に比定される土器群である。

3群1類は半齒状文を主体とするもので、大洞BC式に比定される。2類は大洞C₁式に比定される。3類は大洞C₂式に比定される。4・5類は工字文・入組文が主体をなし、大洞A式に比定される。

以上を整理すると次のようになる。

1群 1類—円筒上層a式

2類—大木8a式

3類—中期末葉

4類—中期後葉（北陸系）

5類—前期末葉～中期前葉

2群——十腰内I式

3群 1類—大洞BC式

2類—大洞C₁式

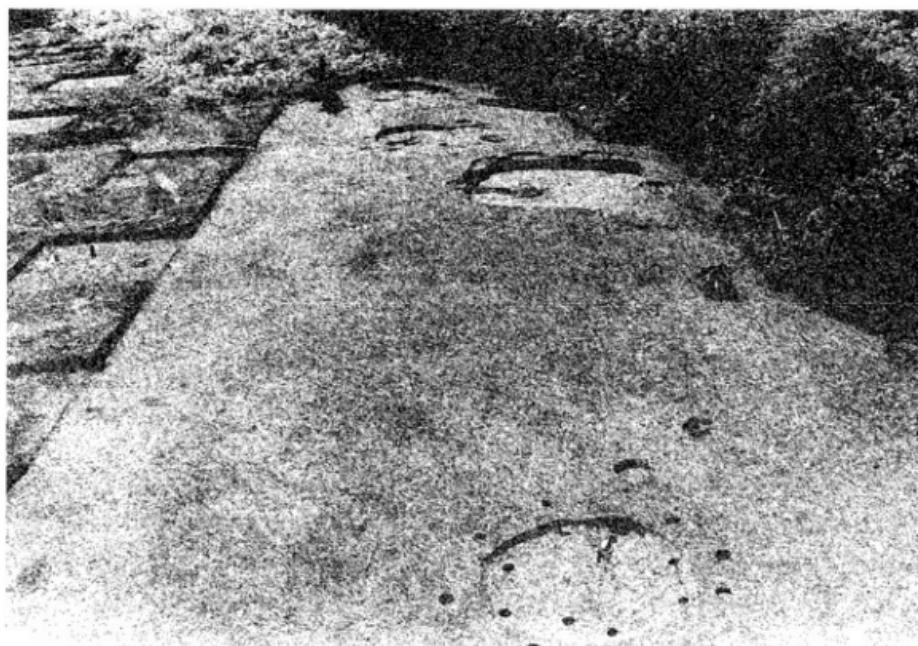
3類—大洞C₂式

参考文献

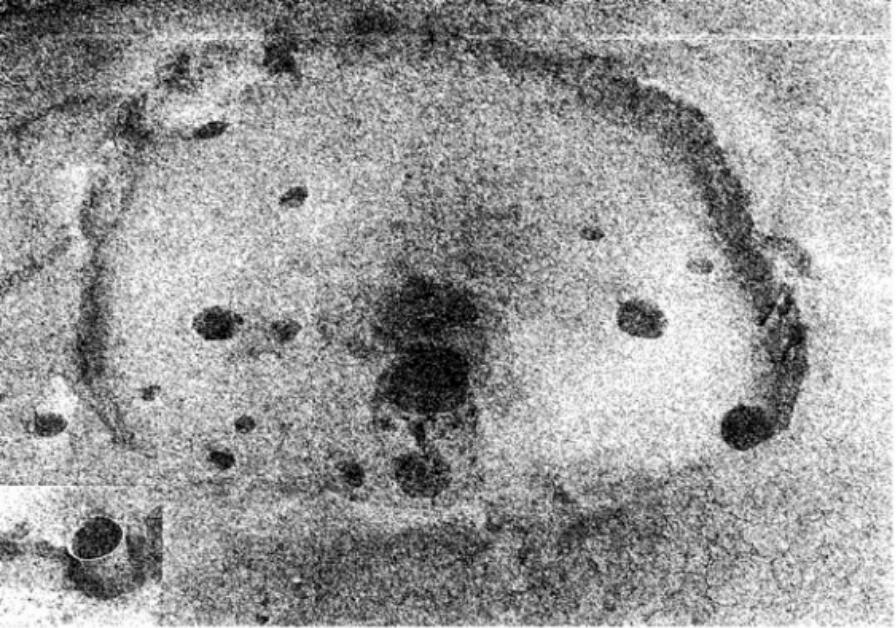
- 秋田市教育委員会：「小阿地下 堤遺跡発掘調査報告書」 1976
秋田県教育委員会：「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」 1979
岸沢長介：坪井清足他：「縄文土器大成第2巻中期」 1981
丹羽茂：「大本式土器」 縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ 1981
秋田市教育委員会：「下堤D遺跡発掘調査報告書」 1982
日黒吉明：「住居の炉」 縄文文化の研究8 社会・文化 1982
秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤G遺跡 野畠遺跡 湯ノ沢B遺跡」 1983



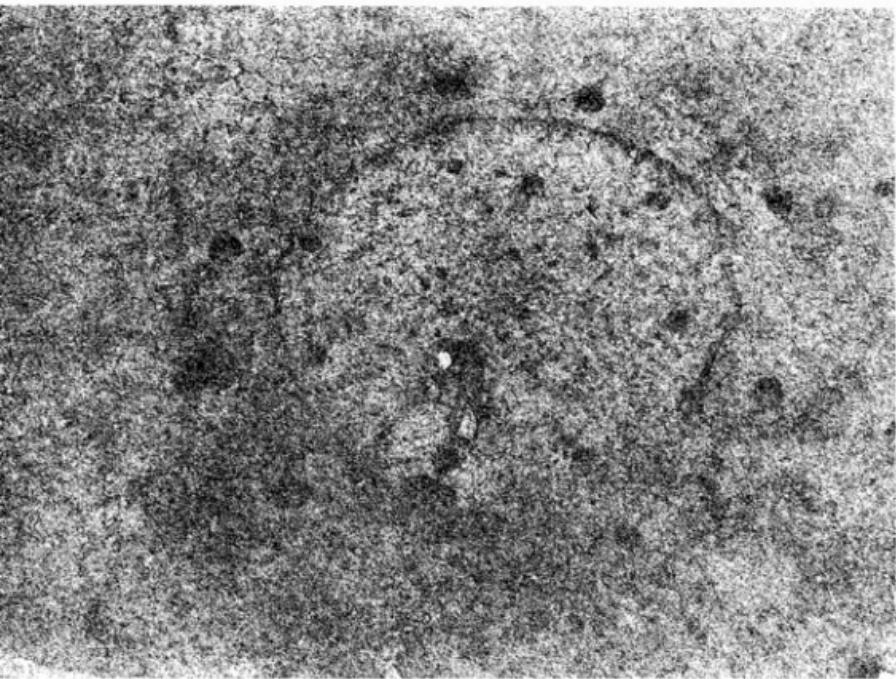
遺跡北側全景（東→）



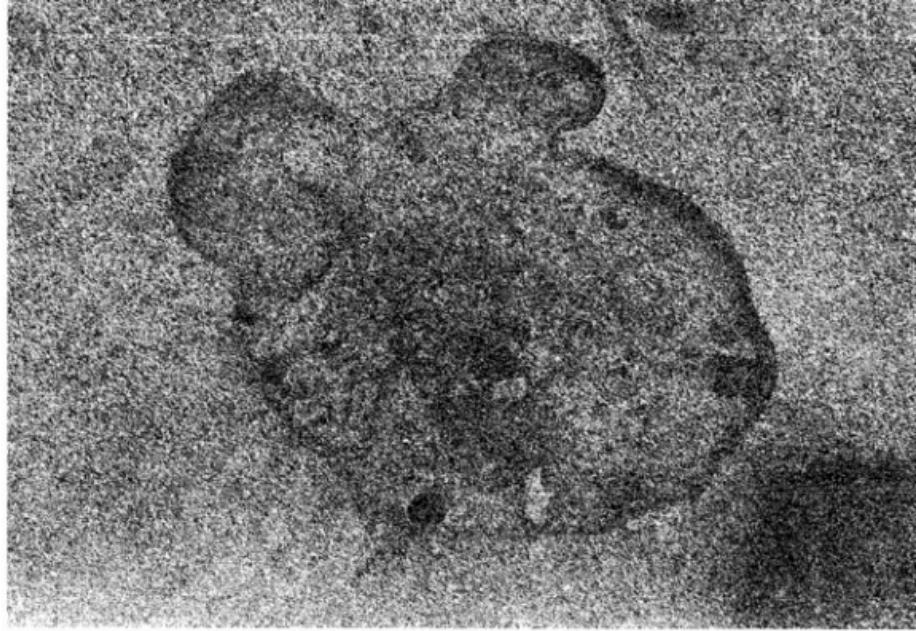
遺跡南側全景（東→）



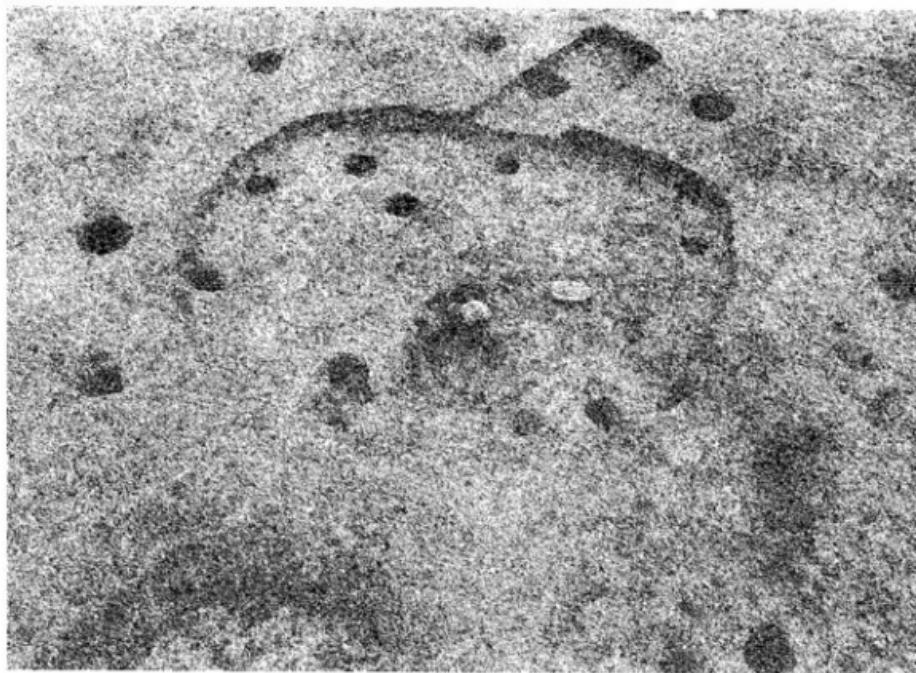
1号住居跡（南→）



2号住居跡（西→）



3号住居跡（南→）



4号住居跡（南→）